

宮園A遺跡2

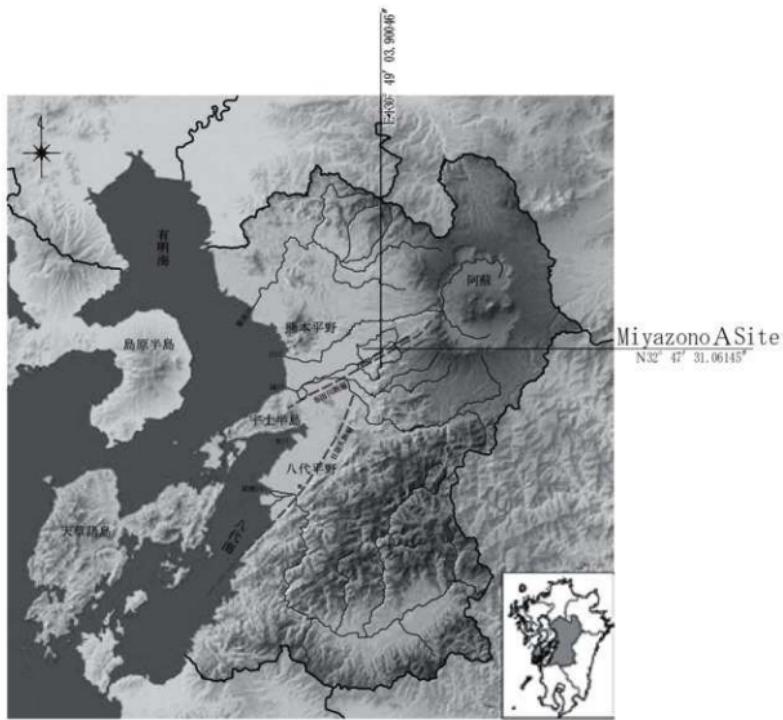
—益城中央被災市街地復興地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022

熊本県教育委員会

宮園 A 遺跡 2

—益城中央被災市街地復興土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—



2022

熊本県教育委員会



宮園 A 遺跡第 2 次調査区上空より朝来山を望む



宮園 A 遺跡第 2 次調査区上空より熊本平野を望む

図版2



宮園A遺跡第2次調査区基本層序（南から）



豊穴建物03 完掘状況（西から）



豊穴建物05 遺物出土状況（南から）



宮園A遺跡第2次調査区西側完掘状況（北西から）

序文

熊本県内において甚大な被害をもたらした平成28年熊本地震から、まもなく6年が経過しようとしています。県では地震からの創造的復興を掲げ、国や被災市町村と連携しながら、住まいの早期再建やインフラ整備など、復旧・復興に向けた事業に取り組んでまいりました。なかでも、震源となった布田川断層帯上に位置する益城町の被害は大きく、その復旧・復興に向けて、県・町が一体となって益城中央被災市街地復興土地区画整理事業や都市計画道路益城中央線事業を推進しています。

そうしたなか、熊本県教育委員会では、土地区画整理事業に伴い、令和元年度（2019年度）から益城町宮園・木山に所在する宮園A遺跡の本格的な発掘調査を実施しています。第1次調査では、弥生時代中期の甕棺墓が13基確認されるなど、弥生時代の墓域が明らかとなり、このたびの第2次調査では、新たに古代の掘立柱建物4軒、竪穴建物5軒を調査し、古代の集落の一端を垣間見る成果をあげることができました。このように、少しづつではありますが、宮園A遺跡の様相がわかつてきています。

本書が研究者のみならず、県民の皆様にも幅広く活用され、地域の文化財を理解する一助になることを切に願います。

最後になりますが、今回の発掘調査並びに本書の作成にあたり、地元の皆様をはじめ関係者、関係機関には多大な御理解・御協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月15日

熊本県教育長 古閑 陽一

例 言

- 1 本書は、熊本県上益城郡益城町に所在する宮園A遺跡における第2次となる埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴い、熊本県知事から依頼を受けて、熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地調査は熊本県教育庁教育総務局文化課が実施し、補助業務を㈱イビソク九州支店に委託した。
- 4 出土遺物等の整理は熊本県文化財資料室で行い、出土遺物の実測・トレース・写真撮影を、㈱イビソク九州支店に委託した。
- 5 本書の編集は、熊本県文化財資料室で行い、矢野裕介が担当した。
- 6 本書の執筆は、矢野が行った。
- 7 本書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は、熊本県文化財資料室で保管している。
- 8 調査にあたり、以下のの方々から助言・協力を得た（順不同・敬称略）。
堤 英介・森木星史（益城町教育委員会）、原田昭一（益城町教育委員会、大分県派遣）、阿比留士朗（益城町教育委員会、鹿児島県派遣）、沖野 誠（益城町教育委員会、宮崎県派遣）、田熊秀幸（益城町教育委員会、熊本県玉名市派遣）

凡 例

- 1 遺跡の座標は、平面直角座標系II系（世界測地系）を使用し、方位は座標北を指す。
- 2 調査に係るグリッドは5m間隔で設定し、グリッド名は、北西隅（X = 23020、Y = -17075）を起点に、東西方向にアルファベット（西から A～M）、南北方向に数字（北から 1～12）を付し、その組み合いで表記している。
- 3 遺構の名称については、調査時には「S」に番号を付して表記（S001～S136）したが、本報告書においては、遺跡としての統一性を図るため、熊本県文化財調査報告第342集と同様、遺構の種別名に番号を付して表記することとし、番号は種別ごとに前報告の続き番号とした。なお、本報告に係る遺構名は、以下のとおりである。
掘立柱建物 01 (S07)、掘立柱建物 02 (S08)、掘立柱建物 03 (S58)、掘立柱建物 04 (S59)、竪穴建物 03 (S01)、竪穴建物 04 (S02)、竪穴建物 05 (S03)、竪穴建物 06 (S56)、竪穴建物 07 (S57)、柵列遺構 01 (S28)、柵列遺構 02 (S60)、柵列遺構 03 (S61)、柵列遺構 04 (S63)、道路状遺構 01 (S62)
- 4 現地での遺構実測は、カマドの平・断面図及び見通し図を10分の1、その他の遺構の平・断面図20分の1の縮尺で行った。
- 5 遺物の実測は原寸で行い、土器・鉄器を3分の1、石器を2分の1の縮尺で掲載した。
- 6 遺構等の土層及び出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』(1967年 農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に従った。
- 7 遺跡分布図は、国土地理院発行 50,000 分の1 の地形図及び熊本県地図統合システムを基に作成した。

宮園A遺跡2

—益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

目 次

口 紜	
序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査の経緯	1
1 事業の概要	1
2 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	2
1 調査の組織	2
2 整理・報告書作成	2
第3節 調査の経過	2
1 発掘調査の経過	2
2 整理作業の経緯	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
1 遺跡の位置	4
2 周辺の地形・地質	4
第2節 歴史的環境	4
1 周辺の遺跡	4
2 宮園A遺跡の調査成果	6
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
1 調査区の設定	8
2 基本層序	9
3 調査の方法	9
第2節 遺構・遺物	10
1 捨立柱建物	10
2 敷穴建物	14
3 標列遺構	19
4 その他の遺構	24
5 出土遺物	24
第4章 総括	37
第1節 遺構の概要	37
第2節 遺構の年代	37
第3節 遺跡の性格	39
写真図版	
抄 錄	

挿図目次

- 第1図 宮園A遺跡第2次調査区位置図
第2図 周辺遺跡地図
第3図 宮園A遺跡第1次調査遺構配置図
第4図 宮園A遺跡第2次調査区全体図
第5図 調査区基本層序
第6図 調査区土層断面図
第7図 挖立柱建物01 遺構実測図
第8図 挖立柱建物02 遺構実測図
第9図 挖立柱建物03 遺構実測図
第10図 挖立柱建物04 遺構及び出土遺物実測図
第11図 壊穴建物03 遺構実測図
第12図 壊穴建物03 カマド実測図
第13図 壊穴建物03 柱穴及び硬化面下土坑実測図
第14図 壊穴建物03 出土遺物実測図
第15図 壊穴建物04 遺構及び出土遺物実測図
第16図 壊穴建物05 遺構及び出土遺物実測図
- 第17図 壊穴建物06 遺構実測図
第18図 壊穴建物07 遺構実測図
第19図 壊穴建物06・07 出土遺物実測図
第20図 横列遺構01 遺構実測図
第21図 横列遺構02・03 遺構及び出土遺物実測図
第22図 横列遺構04 遺構実測図
第23図 道路状遺構01 遺構実測図
第24図 その他の遺構出土遺物実測図
第25図 調査区出土遺物（須恵器）実測図
第26図 調査区出土遺物（須恵器）実測図
第27図 調査区出土遺物（黒色土器）実測図
第28図 調査区出土遺物（土師器）実測図
第29図 調査区出土遺物（土師器）実測図
第30図 調査区出土遺物（土製品・鉄製品・繩文土器・石器）実測図
第31図 調査区全体図

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 遺物観察表

第3表 遺物観察表

第4表 遺物観察表

第5表 遺物観察表

第6表 遺物観察表

図版目次

図版 1

1. 宮園A遺跡第2次調査区より船野山、飯田山を望む
(北から)
2. 宮園A遺跡第2次調査区より阿蘇南外輪山を望む
(西から)

7. 壊穴建物05 土層断面（南から）
8. 壊穴建物05 遺物出土状況（南から）

図版 2

1. 調査区西側完掘状況
2. 調査区中央～東側完掘状況

1. 壊穴建物05 完掘状況（南から）
2. 壊穴建物06 検出状況（西から）
3. 壊穴建物06 土層断面（西から）
4. 壊穴建物06 カマド及び遺物出土状況（西から）
5. 壊穴建物06 完掘状況（西から）
6. 壊穴建物07 検出状況（北西から）
7. 壊穴建物07 土層断面（西から）
8. 壊穴建物07 カマド完掘状況（南から）

図版 3

1. 挖立柱建物01 検出状況（南西から）
2. 挖立柱建物01 完掘状況（南西から）
3. 挖立柱建物02 検出状況（北から）
4. 挖立柱建物02 完掘状況（北から）
5. 挖立柱建物03 検出状況（北から）
6. 挖立柱建物03 完掘状況（北から）
7. 挖立柱建物04 検出状況（南から）
8. 挖立柱建物04 完掘状況（南から）

1. 壊穴建物07 完掘状況（西から）
2. 横列遺構01 完掘状況（東から）
3. 横列遺構02 検出状況（西から）
4. 横列遺構02 完掘状況（西から）
5. 横列遺構03 検出状況（西から）
6. 横列遺構03 完掘状況（西から）
7. 横列遺構04 完掘状況（東から）
8. 道路状遺構01 完掘状況（西から）

図版 4

1. 壊穴建物03 検出状況（南から）
2. 壊穴建物03 土層断面（南から）
3. 壊穴建物03 硬化面検出状況（南から）
4. 壊穴建物03 カマド土層断面（西から）
5. 壊穴建物03 カマド東西断面（南西から）
6. 壊穴建物03 カマド完掘状況（西から）
7. 壊穴建物03 カマド完掘状況（西から）
8. 壊穴建物03 完掘状況（西から）

1. 壊穴建物07 完掘状況（西から）
2. 横列遺構01 完掘状況（東から）
3. 横列遺構02 検出状況（西から）
4. 横列遺構02 完掘状況（西から）
5. 横列遺構03 検出状況（西から）
6. 横列遺構03 完掘状況（西から）
7. 横列遺構04 完掘状況（東から）
8. 道路状遺構01 完掘状況（西から）

図版 5

1. 壊穴建物04 検出状況（西から）
2. 壊穴建物04 南北土層断面（西から）
3. 壊穴建物04 東西土層断面（南から）
4. 壊穴建物04 硬化面検出状況（西から）
5. 壊穴建物04 完掘状況（西から）
6. 壊穴建物05 検出状況（南から）

図版 8
遺物 No. 1 ~ 15

図版 9
遺物 No. 16 ~ 33

図版 10
遺物 No. 34 ~ 51

図版 11
遺物 No. 52 ~ 69

図版 12
遺物 No. 70 ~ 87

図版 13
遺物 No. 88 ~ 105

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経緯

1 事業の概要

平成28年4月14・16日に発生した「平成28年熊本地震」は最大震度7を観測し、建物や道路の損壊、上下水道やガス、そのほかライフラインの寸断等、県民の生活に甚大な被害をもたらした。震源となった「布田川断層帯」上に位置する益城町では、住宅の全壊2,756棟、半壊・一部損壊7,440棟など被災状況が深刻であった。熊本県では、被災市街地の緊急かつ健全な復興を図る措置として、平成29年（2017年）3月10日に被災市街地復興推進地域の都市計画決定を行い、平成30年（2018年）3月8日に益城町役場が所在する益城町宮園・木山一帯の被災市街地復興土地区画整理事業区域28.3haについて都市計画決定を行った。

2 調査に至る経緯

当該事業の対象区域一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地「宮園A遺跡（縄文・弥生・古代）」であったことから、平成30年（2018年）3月27日付け央土復ま第20号で熊本県県央広域本部長から熊本県教育長へて当該事業対象区域約28.3haの予備調査依頼が提出された。これを受け、熊本県教育庁教育総務局文化課は平成30年度（2018年度）から遺跡の広がりや遺構の有無を確認する予備調査を継続的に行っており、現在に至るまでに80箇所以上のトレーニング調査を実施してきた。また益城町教育委員会においても新居舎建設に伴う事業や大規模盛土造成地滑動崩落防止事業に伴い予備調査を実施しており、これら調査結果を踏まえて、当該事業の対象区域における発掘調査が必要な範囲の絞り込みを行うとともに、令和2年（2020年）6月3日付け教文第446号で周知の埋蔵文化財包蔵地「宮園A遺跡」の範囲を変更するなどの措置を執った（第1図）。

そうしたなか、当該事業の一環として実施することになった益城町役場駐車場跡地の造成工事に伴い行われたのが、宮園A遺跡第1次調査である。平成28年熊本地震からの復旧・復興事業に伴う県外の他自治体から



第1図 宮園A遺跡第2次調査区位置図

の派遣職員の支援を受けて実施しており、令和元年（2019年）10月から約2ヵ月間、調査面積約2,354 m²の調査で、13基の櫛棺が見つかっている。今回の調査は、それに続く第2次調査として位置づけられ、土地区画整理事業の事業範囲のうち北東部の道路敷設部分を対象としたもので、令和2年（2020年）4月から8月まで実施することとなった。

第2節 調査の組織

1 発掘調査

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 中村誠希〔文化課長〕
調査総括 長谷部善一〔課長補佐〕
宮崎敬士〔主幹（文化財調査担当）〕
調査事務 伊藤 昭〔審議員兼課長補佐〕
津田光生〔主幹（総務担当）〕
佐藤賢一〔参事〕
佐藤虹夏〔主事〕
大石ひとみ〔主事〕
調査担当 木庭真由子〔主任学芸員〕
春田哲也〔学芸員〕

2 整理・報告書作成

整理主体 熊本県教育委員会
整理責任者 宮崎公一〔文化課長〕
整理総括 長谷部善一〔課長補佐〕
宮崎敬士〔主幹（文化財調査担当）〕
整理事務 後藤和也〔課長補佐〕
堀 義之〔主幹（総務担当）〕
豊永結花里〔学芸員〕
佐藤虹夏〔主事〕
大石ひとみ〔主事〕
整理担当 矢野裕介〔主幹〕
唐木ひとみ〔会計年度任用職員〕
築出直美〔会計年度任用職員〕

第3節 調査の経過

1 発掘調査の経過

宮園A遺跡第2次調査は、令和2年（2020年）4月21日から8月21日まで実施した。調査は道路敷設工事と併行して実施することとなり、工事の進捗等に合わせて調査区の西側から着手し、東側へと調査範囲を広げていくこととした。その関係で調査区は西側、中央、東側と3つに区分され、それぞれ表土掘削、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、空中写真撮影の順で進めることとなった。

4月21日～28日に調査区西側の表土掘削を行い、5月7日に4級基準点及びグリッド杭を設置後、11日より本格的な発掘作業を開始した。調査区内の基本層序として、12日にⅠ層〔造成土〕、Ⅱ層〔クロボク層〕、

Ⅲ層〔クロボク層（古代以前の遺物包含層）〕、Ⅳ層〔アカホヤ2次堆積層〕を確認した。13・14日にⅡ層を掘削し、14日から遺物包含層となるⅢ層の掘削を開始した。20・21日にⅣ層上面において南北方向、東西方向に並ぶ柱穴群が検出された。27日に堅穴建物03、堅穴建物04の2軒を確認し、28日にⅣ層上面までの掘削が完了した。結果的に、堅穴建物2軒、土坑2基、柱穴40～50基が検出され、柱穴群については、南北3間、東西1間以上の掘立柱建物01、南北2間、東西1間の掘立柱建物02、東西3間以上の柵列遺構01と判明した。29日から各遺構の掘削を開始し、堅穴建物03の床面中央に硬化面が検出され、6月1日に堅穴建物04の床面にも硬化面が検出された。

6月2日に次の調査区中央の表土掘削を行い、表土掘削後、西からⅢ層掘削を開始した。これ以降、調査区西側と調査区中央の調査を並行して進めることとなる。5日に堅穴建物03でカマドが検出され、9日に堅穴建物03の柱配置として、4本の主柱穴と床面中央の柱穴が検出された。また調査区西側の両側壁面付近で検出された土坑は、西側壁面土層の観察から堅穴建物の立ち上がりも確認されたことから、堅穴建物05のカマドであることが明らかになった。15日に柵列遺構01を完掘し、16日に調査区西側の完掘状況の空中写真撮影及び空撮図化写真測量を実施した。17日に堅穴建物03において、カマド北側に土坑状の遺構、南側に小土坑状の遺構と土坑状の遺構をそれぞれ確認した。同日、調査区西側については遺構掘削が完了したことから、遺構完掘状況の写真撮影を実施した。

6月22日に最後となる調査区東側の表土掘削を行い、これ以降、調査区中央と調査区東側の調査を並行して進めることとなる。調査区中央についてはⅢ層掘削を継続し、堅穴建物06、堅穴建物07の2軒が検出された。また調査区東側では、表土が残存する状況が認められたことから、表土掘削を人力により進めることとなった。24日に堅穴建物06、堅穴建物07とともに、平面方形プランで南側の調査区外に展開し、北側にカマドが付くことを確認した。

7月2日に調査区中央の遺構検出状況の空中写真撮影・空撮図化写真測量を実施した。調査区中央では柱穴と土坑を40基程度が検出されており、空撮図化写真測量から遺構配置図を作成し、遺構の検討を行うこととした。

7月3日から15日までの間、梅雨の長雨による作業中止が続き、16日から作業を再開した。調査区東側については、表土（一部Ⅲ層）の掘削を継続し、17日にⅣ層上面に到達した。22日に調査区中央で東西2間、南北2間以上の掘立柱建物03、北側の調査区外に展開する掘立柱建物04を確認した。また、調査区東側で東西方向に平行して延びる3条の硬化面が認められ、21日に道路状遺構01と認定した。29日に調査区中央で、東西方向に並ぶ柱穴5基以上からなる柵列遺構02とその北側に東西方向に並ぶ柱穴3基からなる柵列遺構03を確認した。

8月4日に調査区中央の堅穴建物06の床面で柱穴2基が検出され、5日に堅穴建物07のカマド袖部の立ち上がりを確認した。7日に調査区東側及び調査区中央の空中写真撮影及び空撮図化写真測量を実施した。お盆休みを挟み、17日に調査区東側の北壁面で、Ⅳ層以下の基本土層の確認を行い、Ⅳ層上面から約0.3～0.5m下に、暗褐色土主体のシロニガ層を確認した。20日に調査区東側・中央の遺構掘削が終了したことから、遺構完掘状況の写真撮影を行い、21日に調査区東側・中央の遺構実測図の確認を行い、調査を終了した。

2 整理作業の経過

宮園A遺跡（第2次）発掘調査に伴う整理作業及び報告書作成は、令和2年度（2020年度）から令和3年度（2021年度）にかけて、熊本県文化財資料室にて実施した。

発掘調査終了後となる令和2年度中に、出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行うとともに発掘調査の遺構実測図等の調査図面及び調査写真等の整理作業を実施した。令和3年度に報告書の作成に伴い、4月から11月にかけて原稿執筆・挿図・写真図版作成等を行うとともに、出土遺物の実測・トレース・写真撮影業務を委託した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

熊本県中央部、上益城郡の北部に位置する益城町は、東西 11 km、南北 13 km、周囲 45 km の町域を有し、東は阿蘇郡西原村・菊池郡大津町、西は熊本市・上益城郡嘉島町、北は菊池郡菊陽町・同大津町、南は上益城郡御船町と境を接する。明治 22 年（1889 年）の町村制施行により、飯野村、広安村、木山町、福田村、津森村が成立し、昭和 29 年（1954 年）に 5 町村が合併し、益城町となった。

益城町の地形をみると、東から南にかけては、北から城山（480.4 m）、朝来山（469.5 m）、船野山（307.8 m）、飯田山（481.2 m）等、九州山地から続く山稜が連なる。北には高遊原・託麻台地が広がり、主として畑作地帯を形成し、その北端の高遊原は空港として利用されている。台地の南縁辺部には、町の中心部が東西に連なり、そのうち益城町役場の周辺、旧木山町の領域内に宮園 A 遺跡は所在する。西は中央を木山川等が貫流する低地で、水田地帯が広がり、熊本平野の東域をなす。木山川には赤井川、金山川、岩戸川などが注ぎ、台地下を流れる秋津川と江津湖で合流し、その先は加勢川となり有明海へと注いでいる。

2 周辺の地形・地質

益城町の地形は山地、丘陵地、台地、段丘、低地と複雑な様相を呈している。山地は阿蘇外輪山の西辺をなしており、安山岩からなる船野山を除き白亜紀層からなる。丘陵地は南の御船町の領域に発達しており、浸食により独立丘陵状をなす。台地は阿蘇の溶岩台地と火碎流台地からなり、前者は高遊原に顯著で、後者は標高 100 ~ 200 m の台地で、益城から菊陽、熊本市東部にみられる。段丘低地は三段みられ、第 4 阿蘇火砕流堆積物により構成され、低い段丘には初期の農業開発の生活拠点として利用されている。

木山川沿いの低地には、礫・砂・泥からなる現世の堆積物がみられ、下陳などの外輪山の末端部には、安山岩の巨礫を主とする下陳礫層と呼ばれる砂礫群、津森から猿婦・浅藪にかけては、泥岩を主とする津森層と呼ばれる泥層（湖水の堆積物）が点在する。火山性の岩石としては、赤井付近から、砥川石と呼ばれる無斑品質輝石安山岩がみられ、熊本平野の地下にも広く分布する。金山川沿いには緑色片岩を主とする岩石のなかには含銅層状硫化鉄鉱床があり明治期に多く採掘されている。

益城町の基盤層は、阿蘇溶結凝灰岩と呼ばれる阿蘇山の噴出物で灰石と呼ばれ、この上に火山灰が覆う。標準的な土層断面をみると、黒ボクと呼ばれる黒色土の下に、黒ニガと呼ばれる黒色の硬い土があり、その下に赤ニガ、ゴマニガと呼ばれる土が認められローム土となる。

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

宮園 A 遺跡が所在する益城町内の遺跡を、以下のとおり時代を追ってみていくことにする（第2図・第1表）。
旧石器時代

現在のところ益城町内において旧石器時代の遺跡の発掘調査事例はないが、塔平遺跡（益城町大字小池）で細石器・スクレイバー・剥片・礫器が表面採集され、高遊原台地上の日向地内の予備調査で姶良 Tn 火山灰を包含する層の上位より緑色チャート製二次加工剥片 2 点が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期と後晩期の遺跡が所在する。早期の遺跡としては、昭和 47 年（1972 年）に九州自動車道に伴う発掘調査が実施された櫛島遺跡（益城町大字島田）がある。早期の押型文土器や塞ノ神式土



第2図 周辺遺跡地図

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
43 益町											
43-001	小久保跡	上小久保 下小久保	绳文～中世	台場地		43-013	八反田遺跡	祇川 八反田	生	埋葬	出生・中世使用
43-009	山川跡	安永 古川	古生・古墳	墓葬		43-014	秋水下指揮	小池 秋水・神生源	古墳	理葬	
43-010	朝山跡	丘崎 薩山・西原	古生・古代	台場地		43-016	赤井跡	赤井 登町	古代	台場地	土師器
43-011	崩山跡	丘崎 薩山	古墳	古墳	西原さん	43-017	赤井跡	赤井 本丸	中世	墓	「本丸」の地名あり
43-012	古岡跡	古岡 老地	縄文・古生	台場地 土師器		43-018	御原小路	祇原 西魚山	古墳	古墳	平底
43-013	高富遺跡	鹿谷 石作川ほか	绳文・古生・土師器	台場地	五貫	43-019	御原跡	祇原 福田寺	古墳・古代	台場地	大小土師器兼用
43-014	鶴見跡	馬木 鶴見原	縄文・古生	台場地		43-020	御原跡	祇原 案屋	古墳	古墳	「城の堤跡城」
43-015	馬木草塚跡	馬木 鶴見原	古墳	古墳	御原片、室魚器	43-021	安富跡	祇原 村の久保	古墳	古墳	
43-016	馬木跡	馬木 鶴見原	古生・中世	古墳	御原・古墳	43-022	御原跡	祇原 南御原	古墳	古墳	行水道の発掘調査
43-017	丘崎六木本木跡	丘崎 六木本木	古墳	古墳	御原 福田寺	43-023	御原跡	祇原 大江の久保	古墳	古墳	土師器
43-018	野瀬跡	野瀬 木本	縄文	台場地		43-024	二之右六櫛六	祇原 村の久保	古墳	古墳	
43-019	馬木赤石石器	馬木 木本	古墳	理葬	石器 手製器	43-025	五千石跡	祇原 五千石	古墳	理葬	
43-020	宮園A遺跡	宮園 辻はか	縄文～古代	台場地	カマド跡・火打穴・建物跡	43-026	御原山遺跡	祇原 畠吉山	绳文～古世	台場地	出生・土器・骨塚瓦土器
43-021	和山跡	寺道 墓 / 本	古生・中世	墓	下原に古生後	43-027	上ノ南跡	祇原 上ノ原	古墳	理葬	
43-022	平田遺跡	平田 墓	古生	台場地	生・土器	43-028	安永跡	安永	古生・中世	台場地	
43-023	境・木古崎跡	寺道 墓 / 木	古墳	理葬	円筒・灰陶瓦(移築)	43-029	大迫山跡	安永	古生	台場地	
43-024	上ノ南跡	寺道 上ノ原	古墳	理葬		43-030	天江跡	那木 大江	绳文～平安	台場地	
43-025	上ノ原跡	寺道 上ノ原	古生	理葬	御生・貴賤群	43-031	多型跡		古生	台場地	
43-026	見送跡	寺道 見送	古墳	古墳	御原・五代石	43-032	木の段跡	祇原 木の段	古生	台場地	
43-027	下山跡	木山 下山	绳文～中世	台場地		43-033	松山跡	祇原 松山跡	古文	台場地	調査後期～御原上跡
43-028	山瀬跡	雲瀬 云瀬	縄文～古世	台場地		43-034	二の段跡	安永 二の段	古文～古世	集落	
43-029	今曾跡	安永 今曾利	縄文～中世	台場地		43-035	小堀跡	寺道 小堀	古生・中世	台場地	
43-030	寺中・神内跡	寺中 上神内	古墳	古墳	祇原 61年一部造滅	43-036	御原跡	祇原 居屋敷	古文～中世	台場地	
43-031	寺中・神内跡	寺中 上神内	古墳	古墳	祇原町史に名称あり	43-037	小池跡	小池	古生・中世	台場地	
43-032	山瀬跡	雲瀬 云瀬	古墳	古墳		43-038	宮原跡	祇原 宮原	古文～中世	台場地	
43-033	東原・御原跡	東原 御原	古墳	古墳		43-039	居屋敷跡	祇原 居屋敷	中世	台場地	
43-034	御原・御原跡	御原 御原	古墳	古墳		43-040	木山宮原跡	祇原 木山宮原	古代・中世	台場地	
43-035	山瀬跡	鳥田 山瀬	縄文	台場地	御原・土器						
43-036	立石跡	鳥田 立石	古生	台場地	御原・土器						
43-037	東原・御原跡	鳥田 東原・御原	古生	台場地	御原・土器・土器・樂相						
43-038	楓原跡	鳥田 楓原	縄文	台場地							
43-039	立石跡	鳥田 立石	古生	台場地							
43-040	東原・御原跡	鳥田 東原・御原	古生	台場地	御原・土器・樂相						
43-041	秋水跡	小池 秋水は	古生	台場地	御原・土器						

器が出土する遺跡で、溝状の炉穴跡などが見つかっている。後晩期になると、高遊原台地縁辺部を中心に遺跡が増加する。特に古闇遺跡、古闇北遺跡（以上、益城町大字古闇）からは、晩期の黒色磨研土器が出土しており、九州地方における晩期の土器「古闇式土器」の標識遺跡となっている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、木山川によって発達した冲積平野を望む地域に分布している。前期の遺跡として、岩戸川（木山川支流）左岸の水田地帯に位置する八反田遺跡（益城町大字砥川）がある。8基の甕棺墓が見つかっており、甕棺に板付式の壺形土器や夜臼式の甕形土器を使用することが確認された。中期から後期にかけての遺跡として、木山川左岸の秋永遺跡（益城町大字小池）がある。工場誘致の造成に伴い発掘調査が行われ、中期の甕棺や後期の竪穴建物及び環濠の一部と思われる断面V字形の構が見つかっている。また秋永集落の北端に位置する秋永水田遺跡（益城町大字秋永）では弥生土器とともに木杭、木製品が出土し、水田跡が想定されている。このほか、大辻遺跡（益城町大字馬水）からは祭祀土坑や周溝状遺構が見つかっている。また宮園、東無田、下原の甕棺群や平田遺跡（益城町大字平田）出土の甕棺も早くから知られており、宮園の甕棺群や平田遺跡出土の甕棺については、熊本地震からの復旧・復興事業に伴い熊本県文化課や益城町教育委員会によって発掘調査が実施されている。

古墳時代

古墳時代の遺跡としては、高遊原台地・託麻台地縁辺部や小池、福原、上陳の台地上に墳墓が展開する。前期から中期にかけては、安山岩製板石で造られた箱式石棺が小池の台地上、広崎から寺迫に至る台地縁辺部、福原、上陳の台地上などに分布し、內行花文鏡が副葬された城の本古墳群（益城町大字寺迫）や秋永遺跡の方形周溝墓と外部施設を持たない箱式石棺などが認められる。後期になると鬼塚古墳（益城町大字小池）、遠見塚古墳（益城町大字寺迫）、鬼ノ窟古墳（益城町大字福原）などの円墳が築造される。また寺迫から福原にかけての崖面には、迫田横穴群（益城町大字寺中）、福原横穴群（益城町大字福原）などの横穴墓が造営される。墳墓以外の遺跡としては、前期～中期にかけての集落遺跡である小柳遺跡（益城町大字寺迫）が知られる。

古代

古代の遺跡としては、高遊原台地・託麻台地縁辺部を中心に集落遺跡が展開する。近年、大辻遺跡ではカマド付竪穴建物や掘立柱建物、祭祀遺構などが確認されるとともに、墨書き土器や平瓦なども出土している。また宮園A遺跡（益城町大字宮園）においても今回の調査も併せてカマド付竪穴建物や掘立柱建物などが見つかっており、古代の集落景観が明らかになってきた。このほか、木山川流域に広がる冲積平野に条里跡が推定されている。これは「阿蘇家文書」に記載のある地名から推定されたものであるが、発掘調査事例は少ない。そのようなか、圃場整備に伴う発掘調査の際に秋永集落北西の横田里推定地域から見つかった水田跡は、古代の条里遺構である可能性が指摘されている。

中世

平安時代末から鎌倉時代以降にかけて、寺院の造営が活発になる。飯田山常楽寺や福田寺、道安寺、東福寺など地区ごとに寺院が造営される。宗派別に寺院をみると、天台宗と禅宗に分類され、なかでも天台宗系の寺院が多い。寺の数と併せて板碑や石塔などの石造物も多く残り、小池遺跡（益城町大字小池）では「寺地面」と呼ばれる地名から寺院が建立されていたと考えられており、30個体ほどの石造物が出土している。

2 宮園A遺跡の調査成果

これまでの経緯

宮園A遺跡は、昭和35年（1960年）に益城町役場周辺の開発で甕棺と人骨が発見され、『益城町誌』に「宮園の甕棺群」と記載されたものの、遺跡の広がりや性格がわからない「幻の遺跡」とされてきた。その後、昭和57年（1982年）に熊本県立第二高等学校考古学部による発掘調査も実施されている。そうしたなか益城中央被災市街地復興土地区画整理事業の一環として、役場跡地で宮園A遺跡第1次調査が実施された。その結果、弥生時代の甕棺墓群をはじめとする縄文～中世の複合遺跡であることが明らかとなった。

第1次調査の成果

第1次調査では、縄文時代後期末に比定される埋設土器遺構1基、弥生時代中～後期に比定される周溝状遺構2基、弥生時代の中期中葉～後葉の甕棺墓13基、弥生時代中期後半の竪穴建物1軒、9～10世紀のカマド付竪穴建物1軒、11世紀頃の土葬墓1基、12～14世紀の溝1条が検出された（第3図）。特に甕棺墓群では、墓域の範囲、形成過程、構成単位等が検討された。また調査区中央で検出された弥生時代の竪穴建物1軒は墓域に関連する施設として位置づけられ、弥生時代の集落城を甕棺墓群の西側に想定された。



第3図 宮園A遺跡第1次調査遺構配置図

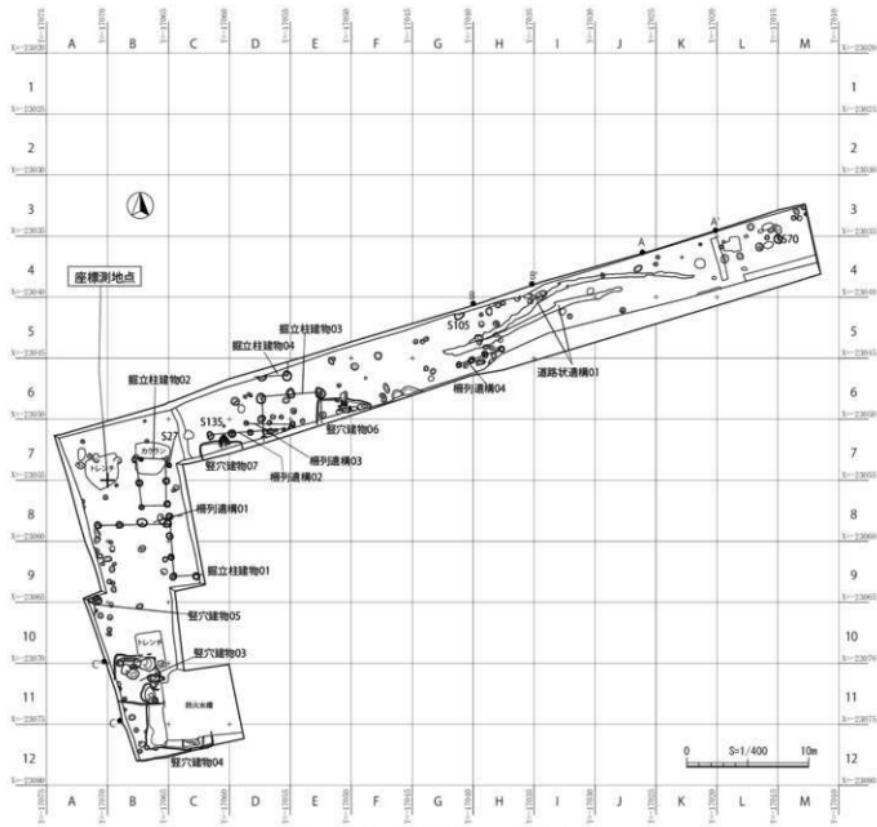
第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

1 調査区の設定

宮園A遺跡第2次調査は、益城中央被災市街地復興土地区画整理事業の事業予定地内のうち道路（6-4号線）敷設部分の調査として実施した。事前に実施した予備調査の結果を基に、道路の形状に沿う形で、南から北へ長さ約28m、最大幅10m、そこから東へ折れ、長さ約54.8m、最大幅6mと鉤状を呈する総面積約635m²の範囲を調査区として設定した。

調査にあたっては、周辺の工事の進捗等に併せて道路敷設部分の西側から調査を開始し中央、東側へと調査区を広げ、それぞれ表土掘削、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削、空中写真撮影の順で順次進めることとした。また調査区に対して国土座標軸（世界測地系）に基づく5m間隔のグリッドを設定し、グリッド名は、北西隅（X=-23020, Y=-17075）を起点に、東西方向にアルファベット（西からA～M）、南北方向に数字（北



第4図 宮園A遺跡第2次調査区全体図

から 1～12) を付し、その組み合わせで表記することとした(第4図)。

2 基本層序

第2次調査における調査区の基本層序(第5・6図)は、調査区西側において、表土下にⅠ層〔造成土〕、Ⅱ層〔クロボク層〕、Ⅲ層〔クロボク層(古代以前の遺物包含層)〕、Ⅳ層〔アカホヤ2次堆積層〕を確認し、Ⅳ層以下は、調査区東側に設定した東西幅5m×南北幅1mのトレンチ〔B-B'〕で、V層〔クロニガ層〕、VI層〔シロニガ層〕を確認した。

第1次調査の調査区でも、表土下に造成土、クロボク層、アカホヤ2次堆積層、クロニガ層、シロニガ層、ローム層の順での堆積が確認されており、同様の層序といえる。

調査区周辺の地形は、西から東に向かってなだらかに上がっており、実際には、表土除去後、調査区西側でⅡ層以下、調査区中央ではⅢ層以下、調査区東側ではⅣ層以下(部分的にⅢ層が残存)が残存する状況を確認している。

3 調査の方法

表土掘削

表土掘削は工事の進捗等に併せて道路敷設部分の西側から中央、東側へと計3回に分けて実施した。表土掘削は0.4m²平爪のバックフォを使用しており、基本的にⅢ層上面まで深度0.5m程度を掘削した。調査区東側については、部分的に表土が残存したため、人力による掘削も併用した。

遺構検出・掘削

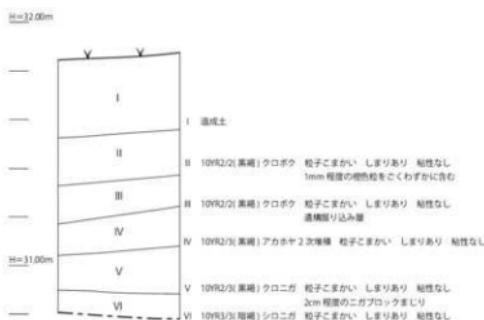
遺構検出・掘削にあたっては、移植コテ、鋏簾、ネジリ鎌等を用い人力で実施した。遺構の検出は、Ⅳ層上面で実施し、調査区中央・東側においては樹根との区別を意識しながら遺構の検出に努めた。

遺構実測

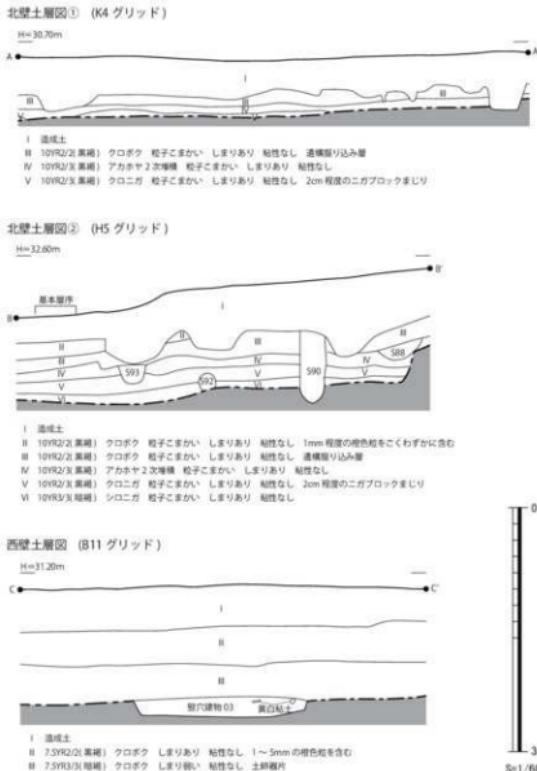
遺構の実測については、トータルステーション、オートレベル、ドローン等を用いて、SfM/MVSによる三次元計測を行い、遺構平面図及び断面図(20分の1縮尺)を作成した。また、掘立柱建物あるいは柵列遺構の区別が困難な状況であった箇所については、遺構検討のため空撮図化写真測量から遺構配置図を作成した。

写真撮影

遺構等の写真撮影は、フルサイズのデジタルカメラを使用し、RAW形式とJPEG形式の双方で撮影した。また作業状況等の写真については、コンパクトデジタルカメラを使用した。高所からの撮影はドローンを用い、個別遺構の全体写真及び遺跡の全景写真、周辺地形の遠景写真を撮影した。



第5図 調査区基本層序



第6図 調査区土層断面図

第2節 造構・遺物

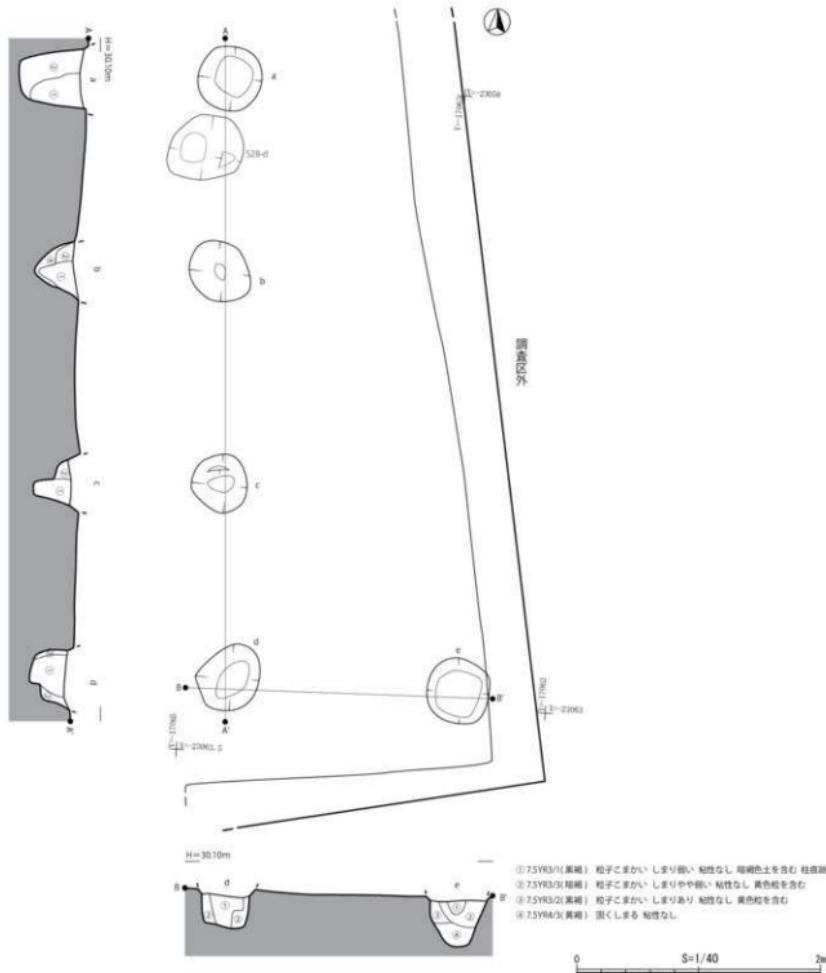
1 挖立柱建物

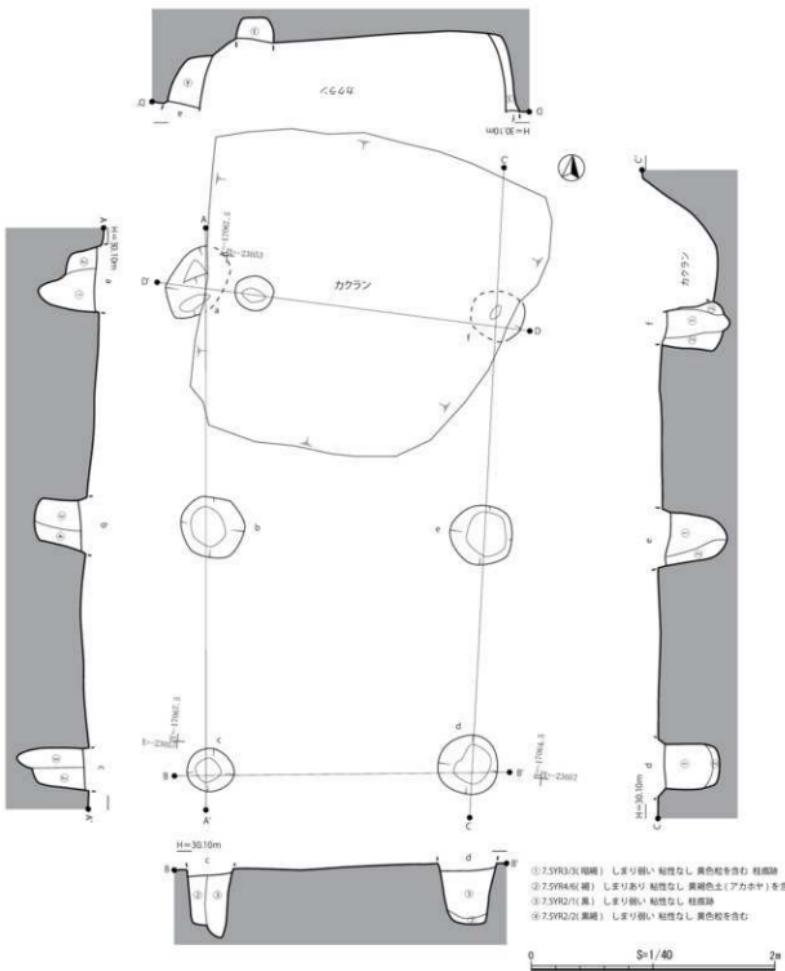
掘立柱建物01 (第7図)

調査区西侧で検出された南北3間×東西1間以上の掘立柱建物である。C-8・9グリッドにまたがって所在し、建物東側が東側の調査区外に展開する。計5基の柱穴(a～e)が検出され、柱間寸法(芯々距離)は、南北で北から1.6m、1.7m、1.7m、東西1.9mを測る。各柱穴は径50～52cmの円形を呈し、深さ34～78cmを測る。すべての柱穴から最大径14～26cmの柱痕を確認した。

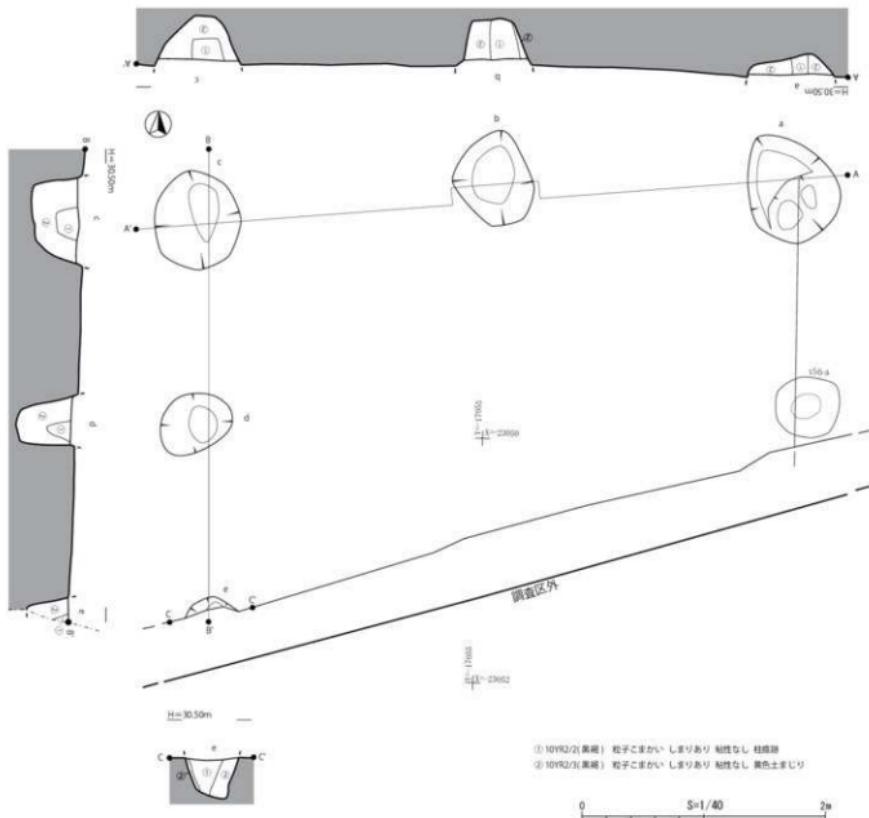
掘立柱建物02 (第8図)

調査区西侧で検出された南北2間×東西1間の掘立柱建物である。B-7・8グリッドにまたがって所在する。計6基の柱穴(a～f)が検出され、柱間寸法(芯々距離)は、南北で西側1.9m、2.0m、東側1.7m、2.0m、東西で北側2.4m、南側2.2mを測る。各柱穴は径30～50cmの円形を呈し、深さ42～60cmを測る。すべての柱穴から最大径16～40cmの柱痕を確認した。





第8図 堀立柱建物02 造構実測図



第9図 挖立柱建物03 遺構実測図

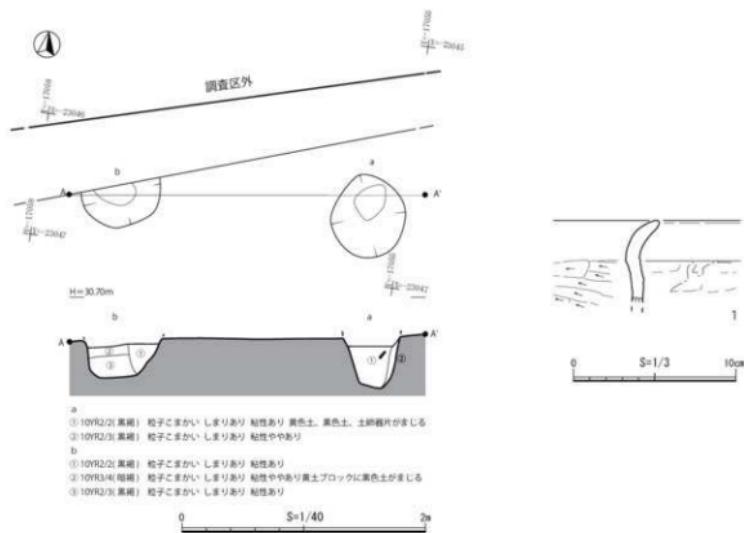
掘立柱建物03（第9図）

調査区中央で検出された南北2間以上×東西2間の掘立柱建物である。D-6・7、E-6・7グリッドにまたがって所在し、建物南側が南側の調査区外に展開する。計5基の柱穴（a～e）が検出され、柱間寸法（芯々距離）は、南北1.6m、東西で西から2.4m、2.5mを測る。各柱穴は径54～80cmの円形を呈し、深さ20～52cmを測る。すべての柱穴から最大径16～26cmの柱痕を確認した。

掘立柱建物04（第10図）

調査区中央で検出された南北1間以上×東西2間以上の掘立柱建物である。D-6、E-6グリッドにまたがって所在し、建物北側が北側の調査区外に展開する。計2基の柱穴（a・b）が検出され、柱間寸法（芯々距離）は、東西2.05mを測る。各柱穴は径64cmの円形を呈し、深さ30～42cmを測る。柱穴2基ともに、最大径24～36cmの柱痕を確認した。

第10図1は柱穴aから出土した土師器甕の口縁～胴部片である。口縁部と胴部の境は明瞭で口縁部はやや外反し、端部をやや尖り気味に仕上げる。胴部内面に横方向のケズリを施し、口縁部内面と胴部外面に煤が付着する。



第10図 挖立柱建物04 遺構及び出土遺物実測図

2 積穴建物

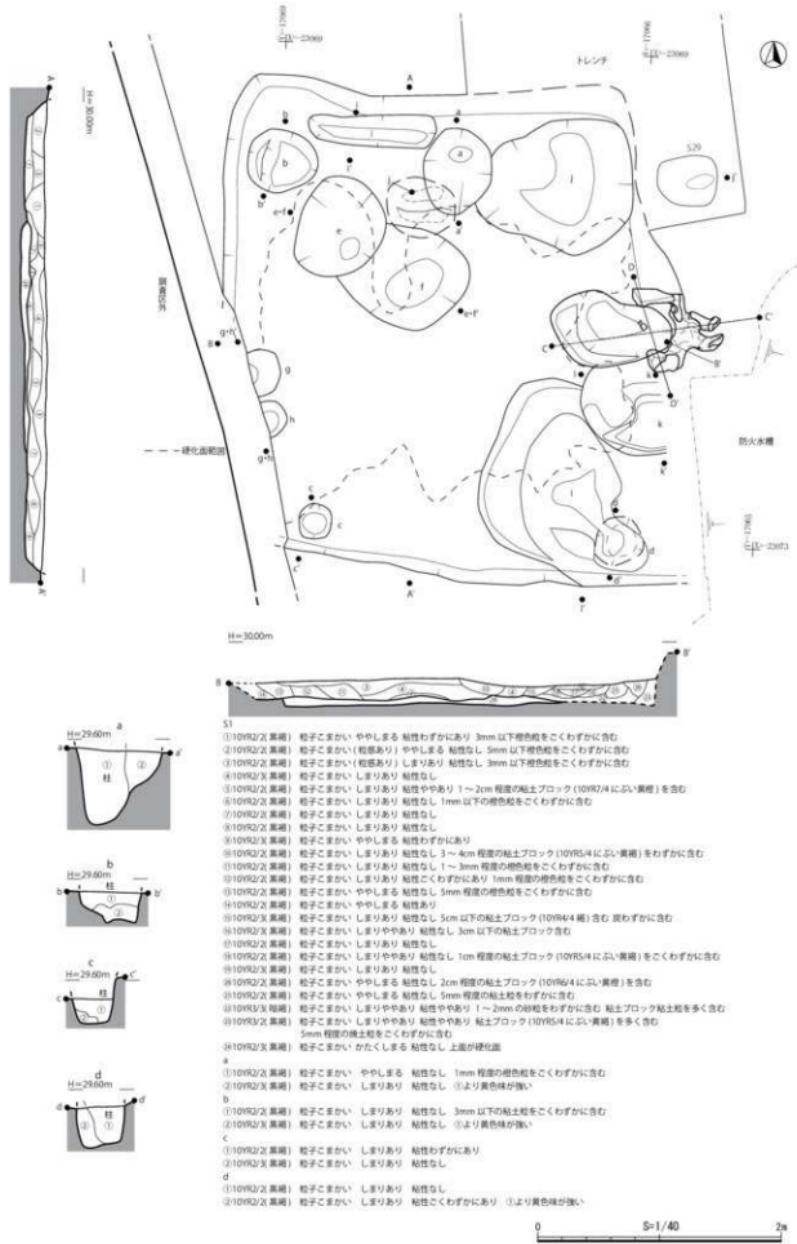
積穴建物03（第11～14図）

調査区西側で検出された南北幅3.7m、東西幅3.6mの平面方形を呈し、東壁中央にカマドを敷設する積穴建物である。B-10・11グリッドにまたがって所在し、建物南東隅は後世の防火水槽で消失し、南西隅は西側の調査区外に展開する。床面中央付近に硬化面が認められ、床面から径30～71cm、深さ20～62cmの4基の柱穴（a～d）が検出された。すべての柱穴から最大径30～50cmの柱痕が確認された。また西壁付近で検出された2基の柱穴（g・h）については、建物入口に伴う遺構の可能性が考えられた。カマドについては、天井部は崩落していたものの、比較的残りが良く、袖部及び燃焼部、煙道部が残存した。袖部は粘性のない黄褐色土（10YR5/6）が使用され、硬く締まる状況が確認されている。このほかカマド北側の床面に土坑（j）、南側の床面に炭化物が混入する土坑（k）、さらに南側の床面に土坑（l）が検出されたが、これらの用途・性格については明らかとされていない。また硬化面下に硬くしまる黒褐色土（2層）の堆積が認められ、貼床と考えられる。

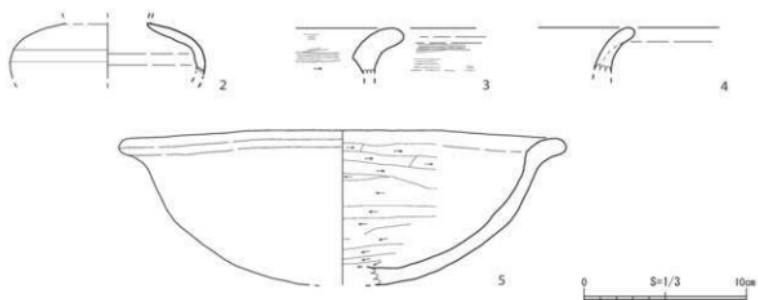
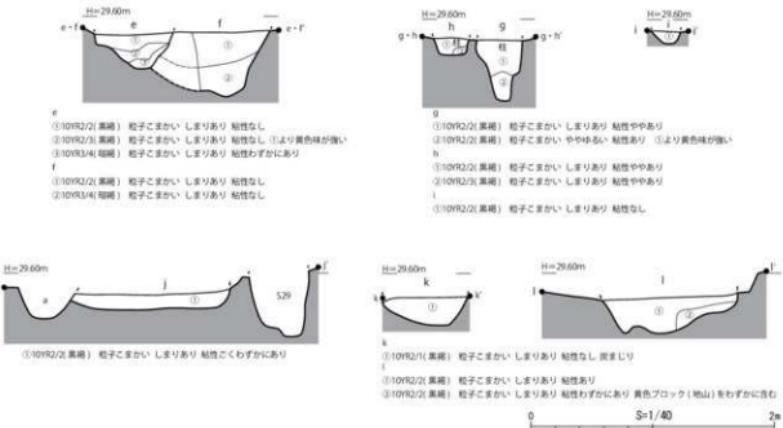
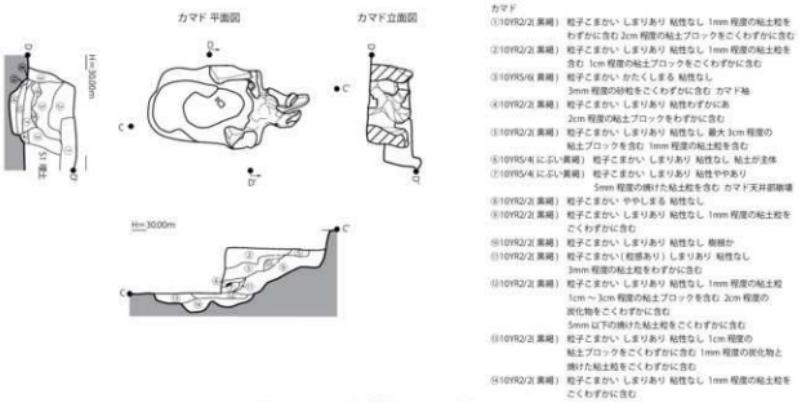
第14図2～5は埋土からの出土遺物である。2は土師器壺の脚部片である。脚部上位に張りがあるもので、内外面ともに橙色（7.5YR6/6）を呈する。3、4は土師器壺の口縁部片である。いずれも口縁端部は丸く仕上げるが、3は厚手で屈曲を伴いながら外に開き、4は薄手となる。3の内面に薄く煤が付着し、4の内面と外面の一部に煤が薄く付着する。5は土師器鉢の口縁～底部片で、復元口径27.6cm、器高8.6cmを測る。底部は丸底で、口縁部は明確に外反し、端部を丸く仕上げる。脚部内面に横方向のケズリが顕著である。

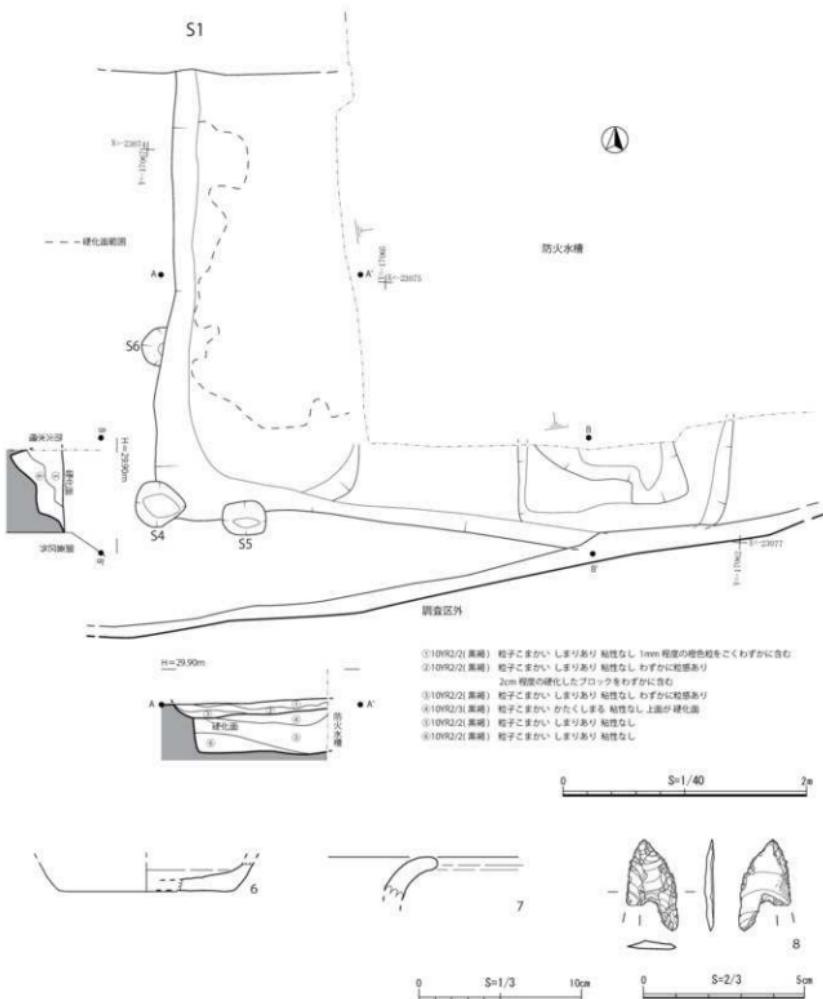
積穴建物04（第15図）

調査区西側で検出された南北幅3.6m以上、東西幅4.6mの平面方形を呈する積穴建物である。B-11・12、C-12グリッドにまたがって所在し、積穴建物03との重複関係から、先行する建物に位置づけられる。建物北東側の大半は後世の防火水槽で消失し、建物北西隅は積穴建物03で削平され、南東隅は南の調査区外に展開する。床面に硬化面の残存が認められるほか、柱穴及びカマドの有無については防火水槽により判然としない。積穴建物03と同様、硬化面下に硬くしまる黒褐色土（④層）、その下層にもしまる黒褐色土（⑤、⑥層）が認められたが、積穴建物の掘方を埋め戻し、その上に貼床をしたものと考えられる。



第 11 図 積穴建物 03 遺構実測図





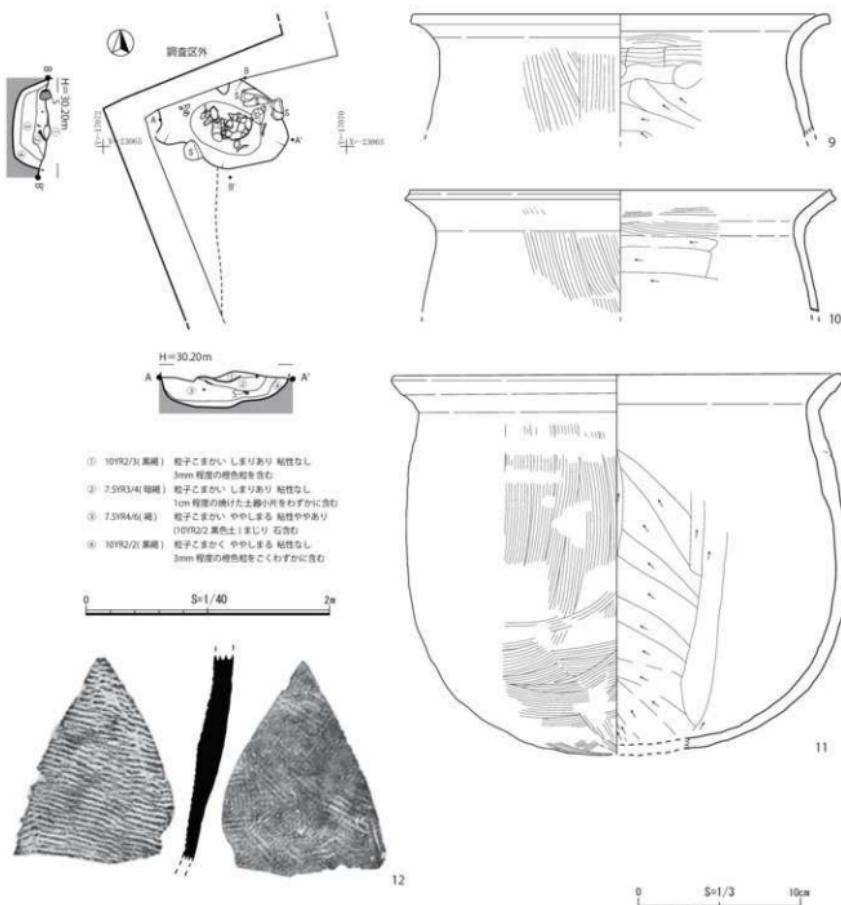
第15図 竪穴建物04 造構及び出土遺物実測図

第15図6～8は埋土中からの出土遺物である。6は土師器壺の底部片である。復元底径10.8cmで、底部中央に向かって器厚が薄くなる。7は土師器壺の口縁～胴部片である。比較的厚手で、口縁部は外に開き、端部を丸く仕上げる。8は石鐵である。基部中央が深く済入する細身の鐵で、左基部が欠損する。石材は腰岳産の黒曜石と考えられる。

堅穴建物 05 (第 16 図)

調査区西側で検出された堅穴建物のカマドである。A-9・10 グリッドにまたがって所在する。発掘当初、不整形の径 1.0 m 程度の土坑と考えられたが、のちに調査区西側壁面に堅穴建物の立ち上がりが認められたことから、堅穴建物のカマドであることが明らかとなった。カマド本体の残存は認められないものの、埋土中には焼土粒、炭化物が多く含まれ、周辺に径 11 ~ 22 cm の礫数点と土師器甕の破片が集中する状況が認められた。うち土師器甕 1 個体の下半部の出土状況から、直立して置かれていた状況も看取できた。

第 16 図 9 ~ 12 はカマド埋土中からの出土遺物である。9 ~ 11 は土師器甕である。いずれも外面にハケ目、内面に横方向のケズギが認められる。9・10 は口縁～胴部片で、口縁端部を平たく仕上げる復元口径は 9 で径 25.0 cm、10 で径 25.7 cm を測る。口縁部は 9 が緩やかに外反するのに対して、10 は明瞭な屈曲を伴



第 16 図 堅穴建物 05 遺構及び出土遺物実測図

いながら外に聞く点で相違する。一方、11は口縁～底部片で、口縁端部を丸く仕上げたものである。口径27.3cm、器高23.4cmを測る。底部は丸底で胴部最大径はやや下半部にある。口縁部はやや厚手で明瞭なくびれを伴いながら外反する。底部外面に煤が付着し内面も加熱により黒色に変異する。12は須恵器壺の胴部片である。胴部下位の破片と思われ、底部に向かって器壁は厚くなる。外面に細格子目タタキを施し、その後、粗いナデで器面を整えている。内面には緻密な平行當て具痕が認められる。

竪穴建物 06（第17図）

調査区中央で検出された南北幅1.5m以上、東西幅4.3mの方形を呈する北壁中央にカマドを付設する竪穴建物である。E-6・F-7グリッドにまたがって所在し、南側は調査区外に展開する。床面から径54～72cm、深さ18～46cmの円形を呈する柱穴2基（a、b）が検出され、柱穴aでは最大径20cm、柱穴bでは最大径34cmの柱痕（⑤層）が確認された。カマドの残存状況は、にぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する東袖部（⑨、⑩層）と燃焼部、煙道部分が残存した。

第19図13は埋土中から出土した須恵器壺の口縁部片である。口縁部は外傾し、端部は一条の回線があり、段状をなし、断面三角形を呈する。

竪穴建物 07（第18図）

調査区中央で検出された南北幅93cm以上、東西幅3.4mの平面方形を呈する北壁中央にカマドを付設する竪穴建物である。C-7・D-7グリッドにまたがって所在し、南側は調査区外に展開する。床面に硬化面が僅かに残り、調査区南壁の土層観察から、径32～49cm、深さ14～18cmの柱穴3基（⑬層）が検出された。カマドについては、比較的の残存状況が良く、暗褐色（7.5YR3/4）を呈する袖部（⑮、⑯層）及び燃焼部、煙道部分が残存した。

第19図14は埋土中から出土した土師器壺の口縁部片である。小型のもので、口縁部はややくびれながら短く外反し、端部を平たく仕上げる。内面には縱方向のケズリが認められる。

3 檻列遺構

檻列遺構 01（第20図）

調査区西側で検出された柱穴4基以上からなる東西方向に延びる檻列遺構である。A-8・B-8グリッドに所在し、東側と西側は調査区外に展開する。柱間寸法（芯々距離）は西から1.8m、1.9m、2.1mを測る。柱穴（a～d）は径55～80cmの円形を呈し、深さ49～78cmを測る。柱穴4基のうち3基（a～c）に最大径25～30cmの柱痕を確認した。

檻列遺構 02（第21図）

調査区中央で検出された柱穴5基以上からなる東西方向に延びる檻列遺構である。C-7・D-7グリッドに所在し、西側は調査区外に展開する。柱間寸法（芯々距離）は西から1.8m、1.5m、1.7m、1.7mを測る。柱穴（a～e）は径40～55cmの円形を呈し、深さ26～54cmを測る。柱穴5基すべてに最大径15～18cmの柱痕を確認した。

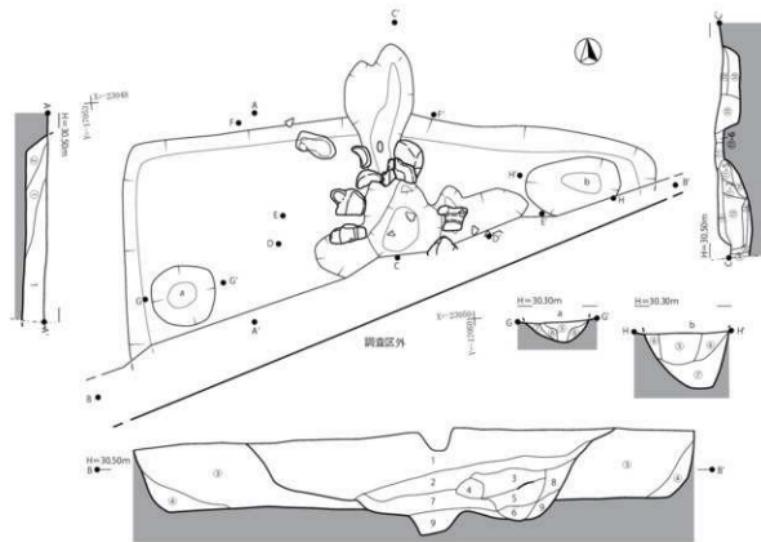
第21図15は柱穴bから出土した土師器壺の口縁～底部片である。底部外面に剥離痕があり、高台付きの可能性がある。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反し、端部を尖り気味に仕上げる。

檻列遺構 03（第21図）

調査区中央で検出された柱穴3基以上からなる東西方向に延びる檻列遺構である。檻列遺構02の北側、D-7グリッドに所在し、西側は調査区外に展開する。柱間寸法（芯々距離）は1.9mを測る。柱穴（a～c）は径35～40cmの円形を呈し、深さ23～49cmを測る。柱穴3基すべてに最大径13～15cmの柱痕を確認した。

檻列遺構 04（第22図）

調査区西側で検出された柱穴4基からなる東西方向に延びる檻列遺構である。G-6・H-5グリッドに所在する。柱間寸法（芯々距離）は西から1.1m、1.2m、1.5mを測る。柱穴（a～d）は径38～53cmの円形を呈し、深さ34～62cmを測る。



不明通路

- 1 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・ややゆるい 粘性なし 1mm程度の粘土粒をこくわざに含む
3mm程度の砂粒をこくわざに含む
 - 2 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の粘土粒、褐色粒をわずかに含む
 - 3 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm～1cm程度の程の粘土粒を多く含む
 - 4 10YR6/6(明黄緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 3mmの粘土ブロックのたまり
 - 5 10YR4/4(緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm～1cm程度の粘土粒。
- 物理粒をかなり多く含む 地塊
- 6 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 5mm以下の粘土粒、褐色粒を含む
 - 7 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm～1cm程度の粘土粒、褐色粒を含む
 - 8 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の粘土粒をこくわざに含む
 - 9 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1cm程度の粘土粒をこくわざに含む

異形建物 06

- ① 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
2mm程度の粘土粒をこくわざに含む アカホヤがまじる
 - ② 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・ややゆるい 粘性なし アカホヤがまじる
 - ③ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の褐色粒をこくわざに含む
 - ④ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・ややゆるい 粘性なし アカホヤがまじる
- 物理粒をかなり多く含む 地塊
- ⑤ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
 - ⑥ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
 - ⑦ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし ③より黄色味が強い



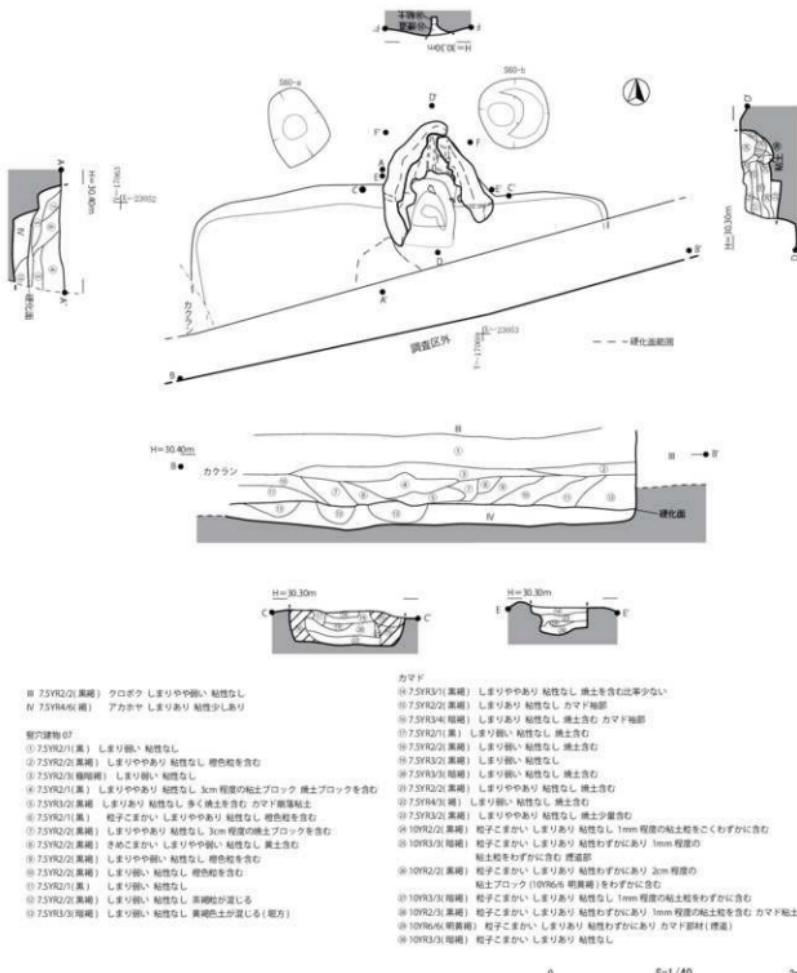
カマド

- ⑧ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の褐色粒をこくわざに含む
 - ⑨ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 5mm程度の粘土粒
1mm程度の褐色粒をこくわざに含む
 - ⑩ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 3mm～2cm程度の粘土ブロックをこくわざに含む
 - ⑪ 10YR4/4(緑) 粒子こまかい・かたくしまる 粘性なし 2～5cmの粘土ブロック。
5mm程度の粘土ブロック含む
 - ⑫ 2 10YR4/6(緑) 粒子こまかい・しまりあり 1～5mmの粘土ブロック含む
5cm程度の粘土ブロック含む 粘土主導の層
 - ⑬ 3 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2～5cmの粘土ブロックを含む
 - ⑭ 5 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1～5mmの粘土粒をこくわざに含む
 - ⑮ 6 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1～2cmの粘土ブロック。
- 地盤ブロックがまじる
- ⑯ 10YR4/4(緑) 粒子こまかい・かたくしまる 粘性なし 8cm程度の粘土ブロック カマド部材
 - ⑰ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の粘土粒を含む
 - ⑱ 4 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 3mm程度の粘土粒をこくわざに含む
 - ⑲ 5 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の粘土粒をこくわざに含む
 - ⑳ 6 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1～5mmの粘土粒を含む
 - ㉑ 7 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1cm程度の粘土ブロックをこくわざに含む
 - ㉒ 8 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
 - ㉓ 9 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の褐色粒をこくわざに含む
 - ㉔ 10 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の粘土粒をこくわざに含む
⑯より黄色味が強い

- ㉕ 10YR5/4(にじ 黄緑) 粒子こまかい・かたくしまる 粘性なし 4cm程度の褐色粒がまじる カマド地盤
- ㉖ 10YR5/4(にじ 黄緑) 粒子こまかい・かたくしまる 粘性なし カドズ部材
- ㉗ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2cm程度の褐色ブロック、
粘土ブロックがまじる 1mm程度の褐色粒を含む
- ㉘ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 3cm程度の褐色ブロックがまじる
1mm程度の褐色粒を含む
- ㉙ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
- ㉚ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の褐色粒を含む
- ㉛ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の褐色粒をこくわざに含む
2cm程度の粘土粒を含む
- ㉜ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 2mm程度の褐色粒をこくわざに含む
- ㉝ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
- ㉞ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 5mm程度の褐色粒をこくわざに含む
- ㉟ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 2mm程度の褐色粒をこくわざに含む
2cm程度の褐色粒をこくわざに含む
- ㉟ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし
- ㉟ 10YR2/2(黒緑) 粒子こまかい・しまりあり 粘性なし 1mm程度の粘土粒をこくわざに含む

S=1/40 28

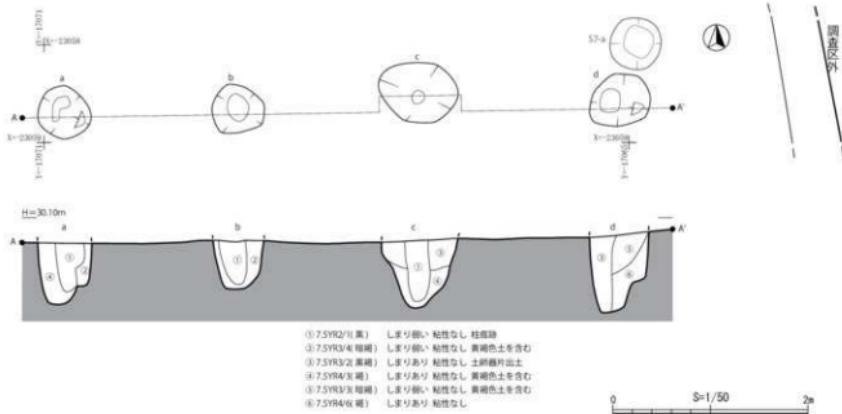
第 17 図 穴立建物 06 構造実験図



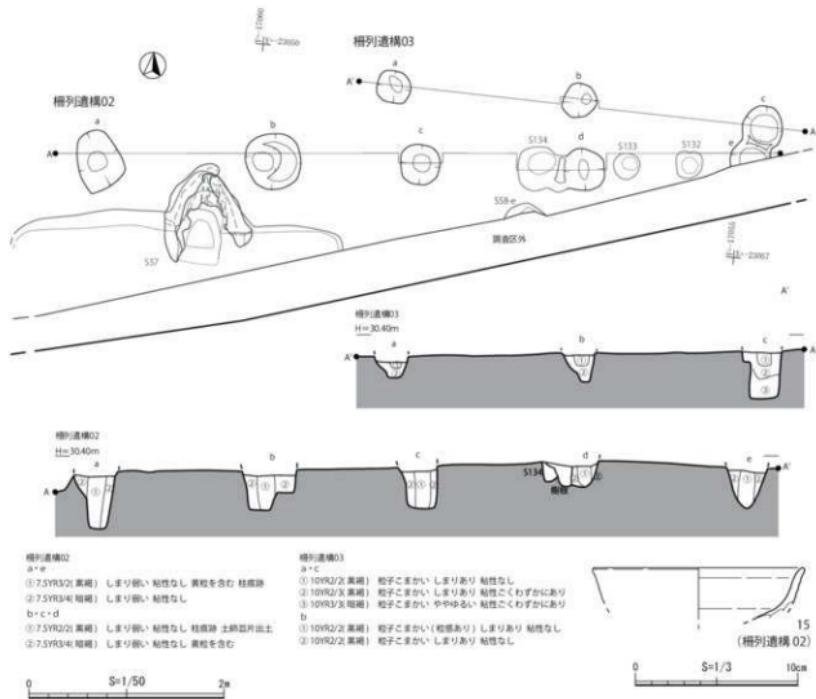
第 18 図 積穴建物 07 遺構実測図



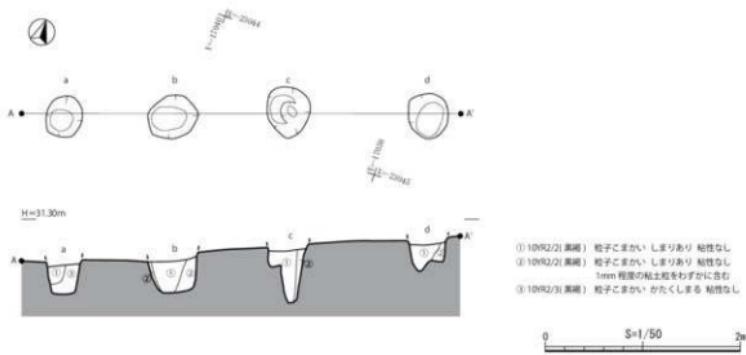
第 19 図 積穴建物 06・07 出土遺物実測図



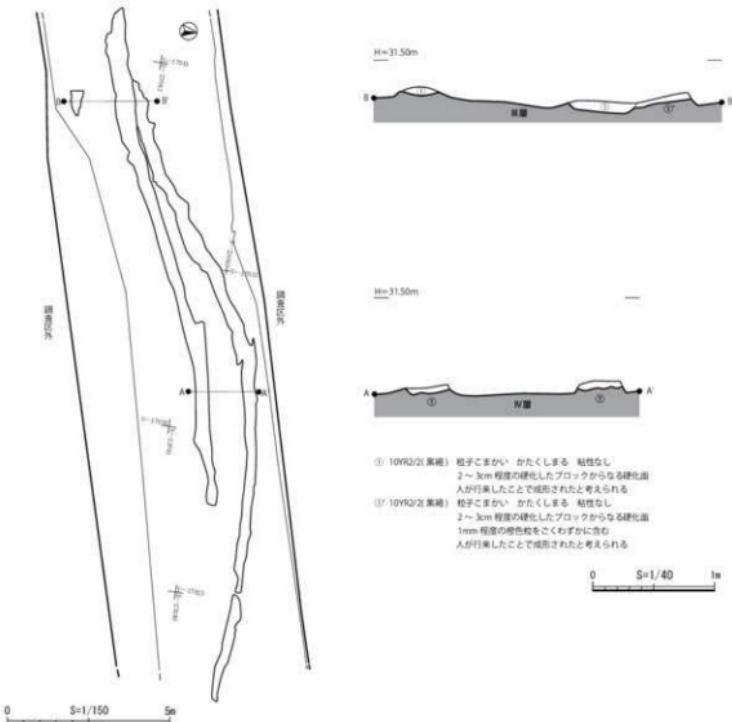
第20図 横列造構 01 道構実測図



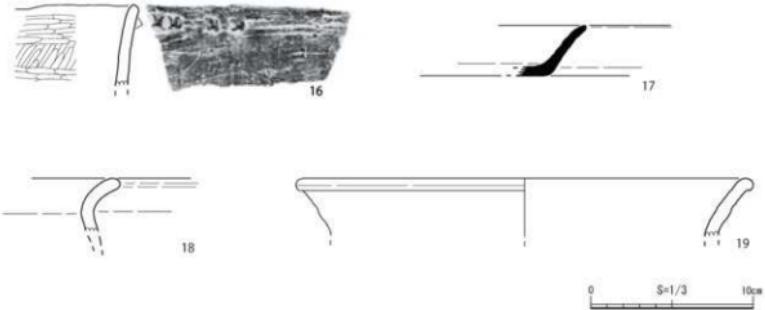
第21図 横列造構 02・03 道構及び出土遺物実測図



第22図 横列造構04 造構実測図



第23図 道路状造構01 造構実測図



第24図 その他の遺構出土遺物実測図

4 その他の遺構

道路状遺構 01（第23図）

調査区東側で検出された3条の硬化面からなる道路状遺構である。並列する南北2条の硬化面はやや弓なりになりながら西から東に向かって延びており、北側は長さ約20m、最大幅60cm、南側は長さ約16m、幅56cmを測る。それら硬化面の南にも一部硬化面が残存する。この道路状遺構に伴う側溝等は判然としない。

柱穴群

このほか、調査区西側で45基、調査区中央で27基、調査区東側で37基の用途不明の柱穴あるいは土坑を検出した。

第24図16～19は柱穴の埋土中からの出土遺物である。16はS 27から出土した繩文土器深鉢の口縁部片である。口縁部よりやや下がった位置に彫りの深い刻目を有する凸帯を巡らすもので、凸帯の大部分は剥離し、わずかに突起状に残存する。内面のヘラミガキが頗著である。17はS 105から出土した須恵器壺の口縁～底部片である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。18はS 70から出土した土師器壺の口縁部片である。やや薄手で、口縁部は大きく外反し、端部を丸く仕上げる。19はS 135から出土した土師器壺の口縁部片である。復元口径27.2cmを測り、口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部は肥厚し、丸い。外面のくびれ部近くに煤が付着し、内面にも薄く煤が付着する。

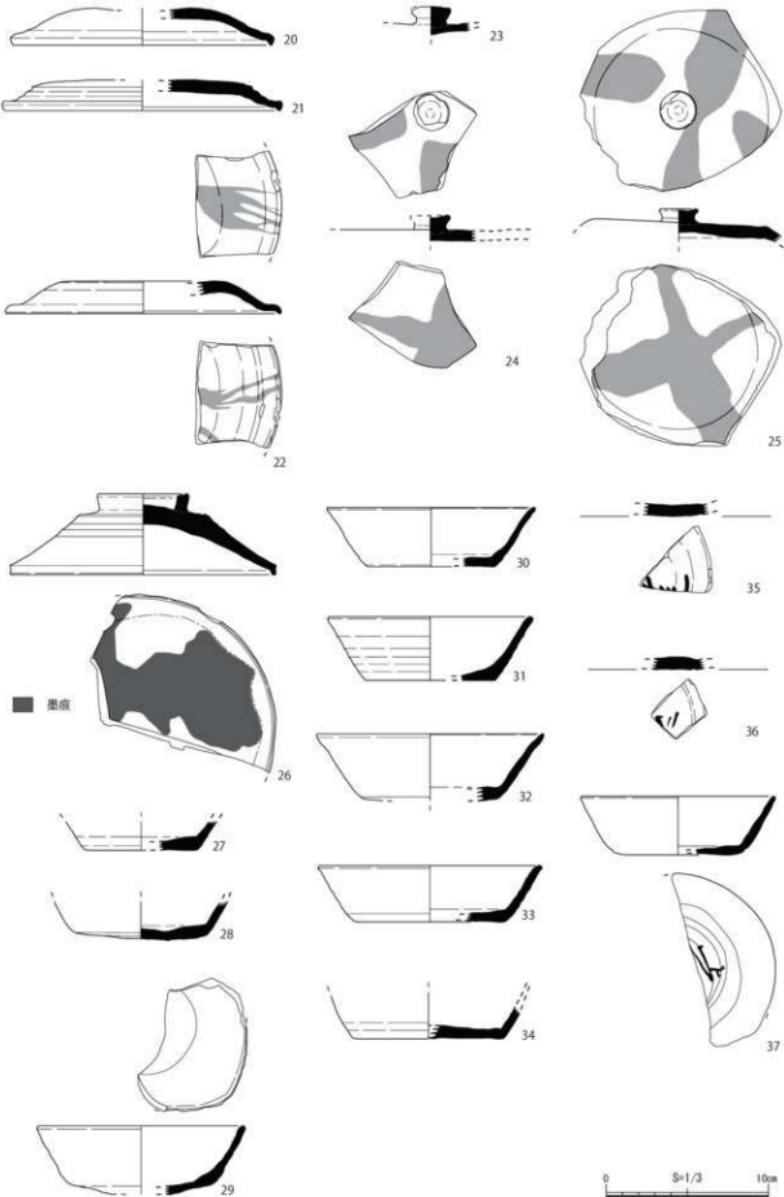
5 出土遺物

ここではグリッド毎に取り上げた遺物を須恵器、黒色土器、土師器、土製品（陽物）・鉄製品、繩文遺物の順で、種別ごとに掲載する。なお、各遺物が出土したグリッドについては、第2～6表に記載した。

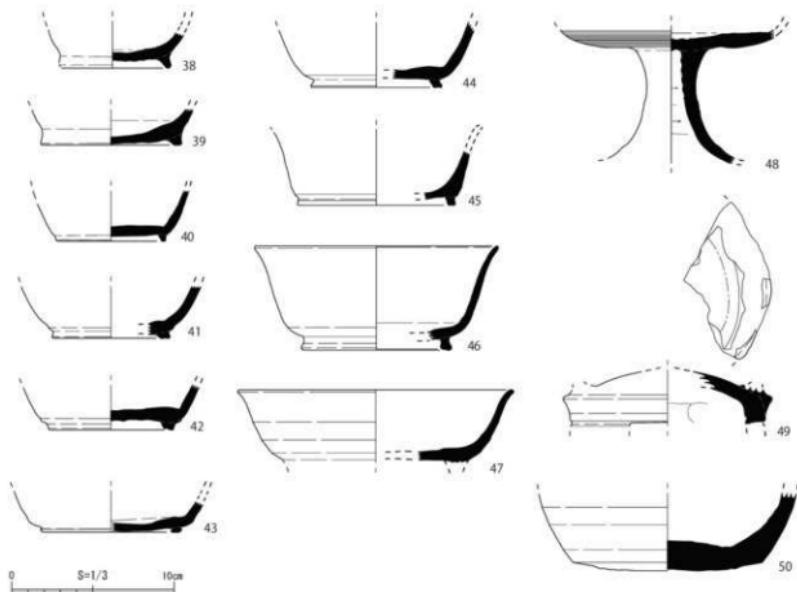
須恵器

第25図20～37・第26図38～50は須恵器である。37はIV層上面、48はII・III層、49は表土（I層）からの出土で、それ以外はIII層から出土した。

20～26は壺蓋である。20～22は天井～口縁部片で、天井部中央につまみを付すかどうか定かではない。復元口径は20で径15.8cm、21で径16.8cm、22で径16.8cmを測り、いずれも扁平な形状で、天井部から緩やかに下り、口縁部近くでくびれを伴いながら外反し、端部を下方につまみ出している。21・22の天井部外面には火襷状の痕跡が認められる。23～25は中央につまみを付す天井部片である。23は碁石状、24・25は中央がくぼむボタン状のつまみが付く。24・25の内外面に十字状の火襷状の痕跡が認められる。26は輪状つまみを付す壺蓋の天井～口縁部であるが、内面に磨痕及び墨痕が認められることから、硯に転用されたものとみられる。復元口径16.4cm、器高5.0cmを測り、天井部端よりやや内側に、断面平行四辺形を呈する高さ1.0cmの輪状つまみを付す。天井部端より外傾しながら下り、口縁端部を下方につまみ出す。丁寧な造りで、外面に薄く自然釉が付着する。



第25図 調査区出土遺物（須恵器）実測図



第26図 調査区出土遺物（須恵器）実測図

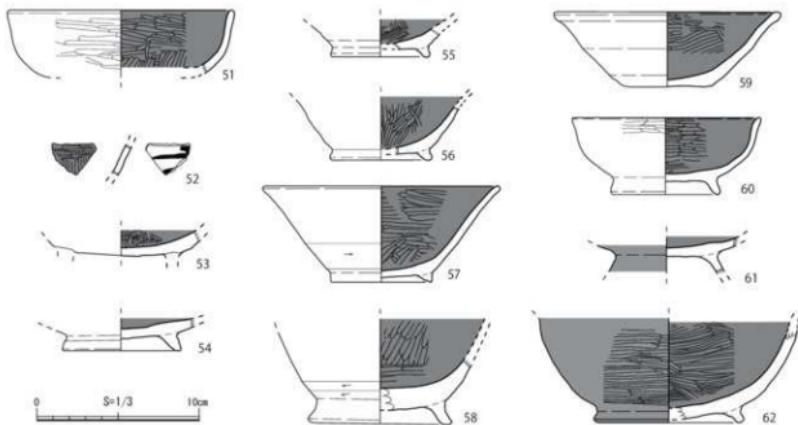
27～34は壺である。いずれもロクロ整形で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。27・28は底部片で、体部は外傾しながら立ち上ることが予想される。27のほうは底径7.0cmと径が比較的小さい。29は口縁～底部片で、器高4.2cmと比較的高く、底部はやや丸みを帯びる。歪みが顕著である。30～33は口縁～底部片で、外傾しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する器形となる。32の口縁部外面の一部に自然釉が薄く付着する。34は底部片で、比較的底径が大きく、底部中央に向かって肥厚する。

35～37は墨書きされた壺である。35・36は底部外面に墨書きの一部が認められるものの、文字は判読できない。37は底部外面に「上」の墨書きが認められる。復元口径11.8cm、器高3.6cmを測る壺で、体部は口縁部まではほぼ直線的に外傾する。口縁部外面の一部に自然釉が薄く付着する。

38～47は高台付壺である。壺と同様、ロクロ成形で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。38・39は底部片で、底部端に断面逆台形の高台を付し、底部中央に向かって丸みを帯びる。39は全体的に摩耗が激しい。40～42は体～底部片で、底部端近くに断面逆台形の高台を付す。43～45は底部端よりやや内側に断面逆台形あるいは方形の高台を付すもので、体部は丸みを帯びながら立ち上がる。43の高台外端に粘土の余りを折り返した跡がみられる。46は口縁～底部片で、復元口径14.8cm、器高6.4cmを測る。底部端より内側に外端を外側にややつまみ出し、端部中央が凹む高台を付す。体部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部近くで外反する。47は口縁～底部片で、高台は欠損する。復元口径16.7cm、残存器高4.45cmと46に比べ径が大きく、扁平となる。

その他の器種として、高壺、壺、甕が出土している。48は高壺の壺へ脚部片で、長脚のものである。壺部は扁平で、脚部は細く、脚部端に向かって緩やかに外反する。壺部外面の周縁に回転カキ目調整を施している。

49は円面甕の甕部片で、脚部に長方形の透かし窓を持つものである。甕部は上部の開いが欠損し、縁部は



第27図 調査区出土遺物（黒色土器）実測図

外側に突起状に突出する。全体的に丁寧な回転ナデ調整を施している。50は壺の底部片である。底部切り離しは、回転ヘラ切りで底部は厚く、胸部はやや内湾気味に立ち上がる。

黒色土器

第27図51～62は黒色土器である。60はⅡ層、62は調査区壁面、それ以外はⅢ層から出土した。

51～58は黒色土器（A類）である。いずれも内面にヘラミガキを施すものである。51は壺の口縁～体部片である。底部は丸底と思われ、体部はほぼ垂直に立ち上がる。52は墨書きされた壺の体部片である。体部外面に墨書きの一部が認められるものの、文字は判読できない。53は壺の底部片で、高台は欠損する。54は壺の底部片で、底部端より内側に断面逆三角形の高台を付すものである。55・56は壺の体～底部片で、底部端に断面逆三角形状の高台を付す。57は壺の口縁～底部片で、復元口径14.2cm、器高5.9cmで、底部には断面逆三角形の高台を付す。体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。58は鉢の体～底部片である。底部はやや丸底で、高台は比較的高く、外に開き、高台端を外に跳ね上げ、尖り気味に仕上げる。59は壺の口縁～底部片である。復元口径13.4cm、器高4.6cmを測り、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。60は壺の口縁～底部片である。復元口径11.5cm、器高4.75cmを測り、底部端に断面逆三角形の高台を付す。体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。

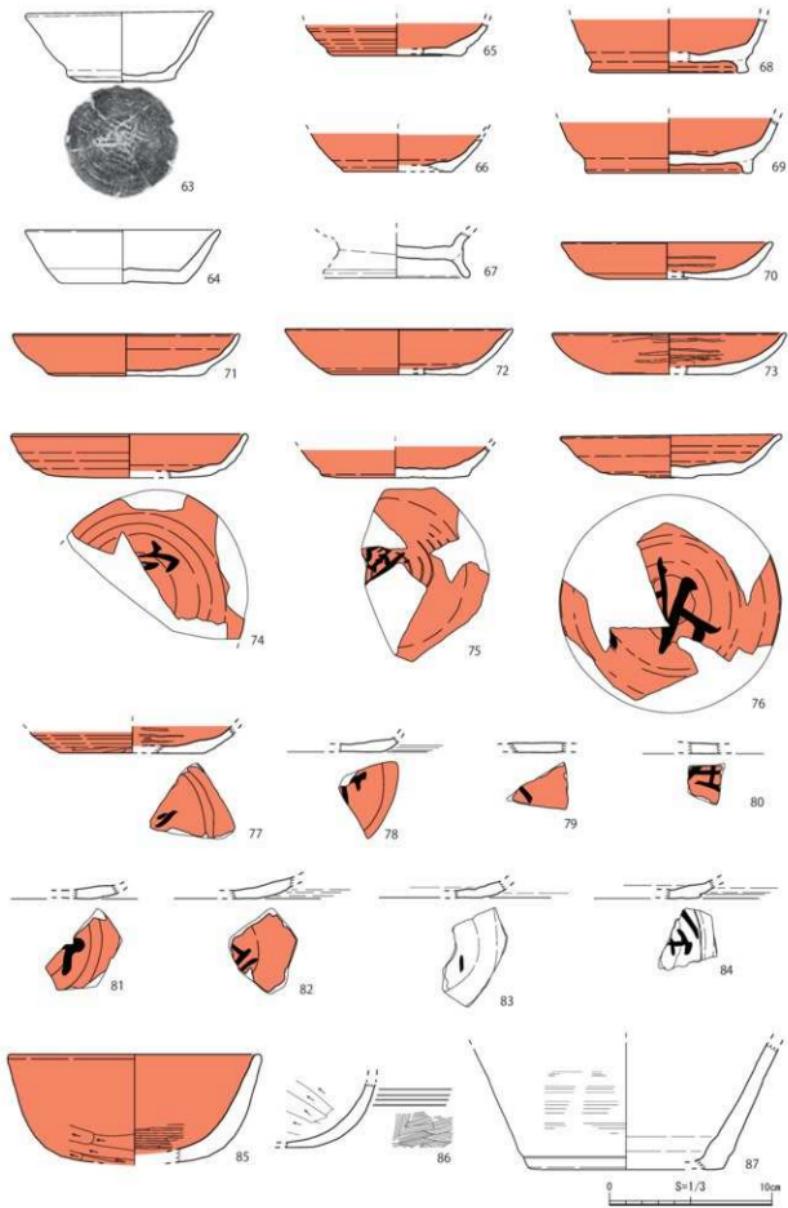
61・62は黒色土器（B類）である。61は壺の底部片で、底部端より内側に、高い高台を付す。62は鉢の体～底部片である。底部端に断面逆三角形の高台を付す。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。

土師器

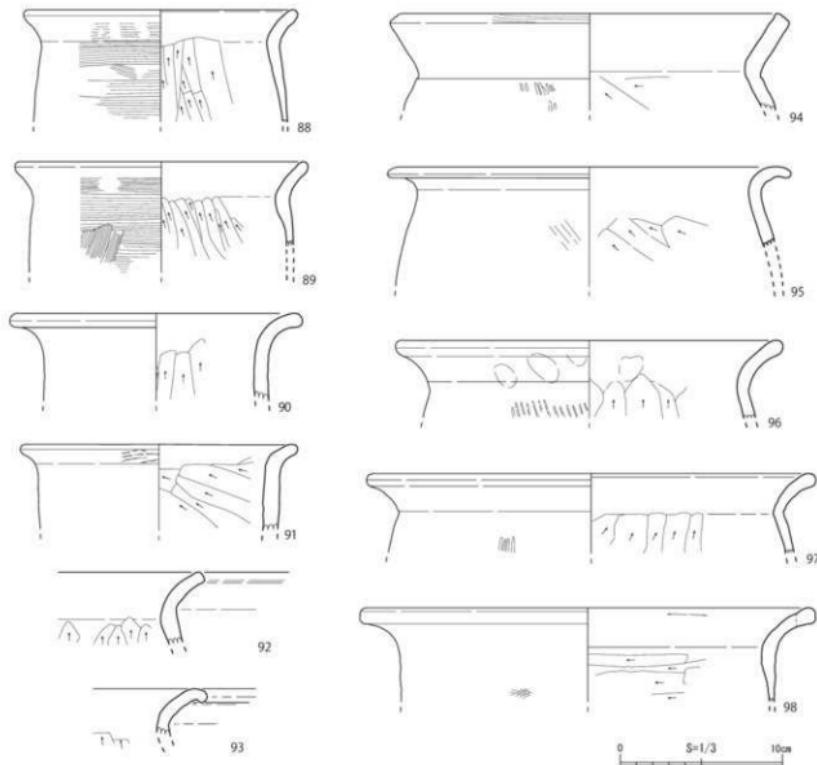
第28図63～87は土師器である。81・82はⅡ層、それ以外はⅢ層から出土した。

63～66は壺である。いずれも底部の切り離しは回転ヘラ切りである。63はほぼ完形品で、口径11.25cm、底径6.6cm、器高4.3～4.9cmを測る。やや歪な形状で、体部は下位に膨らみを持ちながら外傾する。底部に板状压痕が認められる。64は口縁～底部片で、器高3.3cmを測る。底部は厚手で、体部下位はやや丸みを帯び外傾する。65・66は体～底部片で、内外面に丹塗りが施されている。

67～69は高台付壺である。67は底部片で、底部端に比較的高く、外に開く高台を付す。68・69は体～底部片で、内外面に丹塗りが施されている。いずれも底部端に断面逆台形の高台を付し、体部はゆるやかに丸みを帯びながら立ち上ることが予想される。



第28図 調査区出土遺物（土師器）実測図



第29図 調査区出土遺物（土師器）実測図

70～73は皿で、復元口径12.8～14.2cmを測る。底部切り離しは回転ヘラ切りで、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がる。いずれも内外面ともに丹塗りが施されており、73は回転ヘラミガキが顕著に認められる。

74～84は墨書が認められる皿である。

74～82は丹塗りされた皿である。74は底部外面に「字カ」の墨書が認められる。復元口径14.3cm、器高2.7cmの皿で、体部は底部からやや丸みを帯びながら立ち上がるるものである。75は底部外面に「福カ」の墨書が認められる。体部は底部でやや段を有し、やや丸みを帯びながら立ち上がることが予想される。76は底部外面に太く「上口」の墨書が認められる。復元口径13.3cm、器高2.65cmの皿で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。78・81は底部外面に「上」の墨書が認められる。77・79・80・82は底部外面に墨書の一部が認められるものの、文字は判読できない。83・84は丹塗りは認められない。83は底部外面に墨書の一部が認められるものの、文字は判読できない。84は底部外面に「城カ」の墨書が認められる。

85は鉢の口縁～底部片で、復元口径15.2cm、器高6.6cmを測る。内外面に丹塗りが施されている。丸底で、体部はやや外傾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。

86・87は壺である。86は小型丸底壺の胴～底部片である。胴部外面の最大径のところにカギ目が認められる。胴部と底部の外面に煤が付着する。87は胴～底部片で、底径11.4cmの平底である。底部は薄く、胴部は直線的にやや外傾しながら立ち上がる。粘土板積み上げて成形しており、胴部に板状工具による横方向の条痕、底部より9mm程度上に1条の深い条痕が認められる。

第29図88～98は甕の口縁～胴部片である。いずれもⅢ層から出土した。88・89は口縁部が胴部との境を明瞭にしながら外反するもので、口縁端部を丸く仕上げる。復元口径はそれぞれ16.2cm、17.4cmを測る。90・91はやや厚手で、胴部の張りがなく、口縁部はそのまま外反する。復元口径はそれぞれ17.4cm、17.0cmを測る。90の胴部内面、91のくびれ部内面に煤が付着する。92は口縁部と胴部との境を明瞭にしながら外反し、端部を平たく仕上げる。93は口縁部はくびれを伴いながら大きく外反し、端部近くでさきに下方に屈曲し、端部を丸く仕上げる。口縁部に煤が部分的に付着する。94は厚手で、復元口径23.0cmを測る。口縁部と胴部の境が明瞭で、口縁部は直線的に開き、端部を平たく仕上げる。95は口縁部を大きく外反させたもので、端部を丸く仕上げる。復元口径23.4cmを測る。96・97・98は口縁部はくびれを伴いながら外反し、端部を丸く仕上げるものである。復元口径はそれぞれ22.8cm、26.6cm、27.2cmを測る。98の胴部外面に煤が顕著に認められる。

土製品

第30図99・100は土製品（陽物）の先端部片である。99は表土（I層）、100はII層から出土した。

99は亀頭部との境に回線を入れるなど亀頭部の表現が顕著であるが、摩耗が激しく、調整等は不明瞭である。100は欠損が激しいものの、亀頭背面の溝の表現が認められる。全体的に摩耗しており、指押さえがわずかに認められるほか、調整等は判然としない。

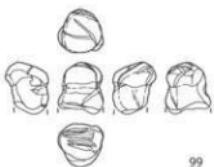
鉄製品

第30図101はⅢ層から出土した鉄製鎌のほぼ完形品である。先端が緩やかにかぎ状となる曲がり刀鎌で、基部を内側に折り込んだ状況が認められる。全体的に鉄鏽が付着し、細部形状までは判然としない。

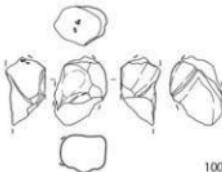
縄文土器・石器

第30図102～104は縄文土器、105は石器である。いずれもⅢ層から出土した。

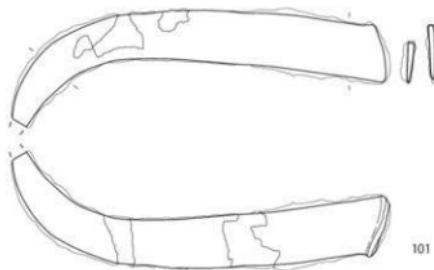
102は深鉢の体部片で、体部外面に2条の刺突窓が2列認められる。103は深鉢の口縁～胴部片である。口縁端と胴部に2条の刻目突窓を付すもので、突窓間は3.7cmを測る。口縁部の突窓はひねり出し、下の突窓は貼り付けている。104は深鉢の口縁～体部片である。口縁部で外反し、端部を尖り気味に仕上げる。外面に一部煤が薄く付着する。105は石鏃である。石材は黒曜石で、先端が折損するほか、ほぼ完形品である。基部はわずかに湾入する程度で、平面2等辺三角形の形状となる。表裏面ともに角から稜を造り出しており、中央下位で結束する。



99



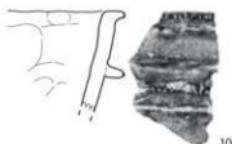
100



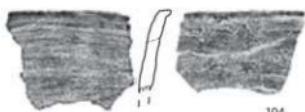
101



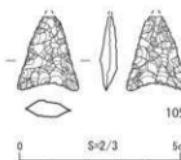
102



103



104



105

0 S=1/3 10cm

0 S=2/3 5cm

第30図 調査区出土遺物（土製品・鉄製品・縄文土器・石器）実測図

第2表 透物觀察表

番号	標本名	種類	形質	アリ	通名	番号	通名	外觀	内觀	頭	胸	腹	備考		
													頭	胸	腹
1 10	上部2	蝶	-	細立毛物04	S59-a	-	鏡片	-	ヨコナダ ^フ 、側方向へカゲリ 回転ナダ ^フ	10186.4 黄褐色	10186.4 黄褐色	10186.4 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較少、 黑糸較多、 無色	良好	
2	上部2	蝶	-	細立毛物03	S91	-	鏡片	-	ヨコナダ ^フ 、側方向へカゲリ 回転ナダ ^フ	10186.5 黄褐色	10186.5 黄褐色	10186.5 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較少、 黑糸較多、 無色	良好	
3	上部2	蝶	-	細立毛物03	S91	-	鏡片	-	ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10186.3 黄褐色	10186.3 黄褐色	10186.3 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
4 14	上部2	蝶	-	細立毛物03	S91	-	鏡片	-	ヨコナダ ^フ	10187.1 黄褐色	10187.1 黄褐色	10187.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
5	上部2	蝶	B-10	細立毛物03	S91	-	鏡片	1/2	(26.3) (9.5)	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
6	上部2	蝶	B-11	細立毛物03	S91	-	鏡片	-	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
7 8	上部2	蝶	-	細立毛物04	S92	-	鏡片	-	ヨコナダ ^フ	10187.4 黄褐色	10187.4 黄褐色	10187.4 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
9	上部2	蝶	A-9	細立毛物05	S93	-	鏡片	25.6	(7.5)	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10187.5 黄褐色	10187.5 黄褐色	10187.5 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
10 16	上部2	蝶	A-9	細立毛物05	S93	-	鏡片	25.6	(7.5)	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10188.1 黄褐色	10188.1 黄褐色	10188.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
11	上部2	蝶	A-9	細立毛物05	S93	-	鏡片	27.3	28.4	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10188.6 黄褐色	10188.6 黄褐色	10188.6 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
12	頭部2	蝶	A-9	細立毛物05	S93	-	鏡片	-	(15.0)	ヨコナダ ^フ	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
13	頭部2	蝶	E-6	細立毛物06	S56	-	鏡片	-	(2.5)	回転ナダ ^フ	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
14	上部2	蝶	-	細立毛物07	S57	-	鏡片	12.6	(2.95)	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10186.6 黄褐色	10186.6 黄褐色	10186.6 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
15 21	上部2	蝶	D-7	細立毛物02	S90-b	-	鏡片	1/6	12.8 (3.2)	回転ナダ ^フ	10186.8 黄褐色	10186.8 黄褐色	10186.8 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
16	觸文土器	西林	B-7	-	S27	-	鏡片	-	(4.95)	ヨコナダ ^フ	10186.9 黄褐色	10186.9 黄褐色	10186.9 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
17 24	頭部2	蝶	G-5	-	S105	-	鏡片	-	3.1	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
18	上部2	蝶	L-4 Y-4	-	S70	-	鏡片	-	(4.15)	ヨコナダ ^フ	10186.7 黄褐色	10186.7 黄褐色	10186.7 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
19 9	上部2	蝶	C-7	-	S135	-	鏡片	27.2	(3.5)	ヨコナダ ^フ	10186.3 黄褐色	10186.3 黄褐色	10186.3 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好
20	頭部2	蝶	B-6	-	-	鏡片	1/3	16.8 (2.3)	回転ナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
21 25	頭部2	蝶	B-9	-	-	鏡片	1/4	16.8 (1.9)	ヨコナダ ^フ 、ナダ ^フ ハタケナダ ^フ ヨコナダ ^フ	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	10186.1 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	
22	頭部2	蝶	G-5	-	-	鏡片	16.8 (2.9)	-	ヨコナダ ^フ	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	10186.2 黄褐色	白糸下白色・ 黒糸下少量、 白糸較多、 黑糸較少、 無色	良好	

第3表 造物體解表

分類	種別	詳細	タグ	遺傳子	遺傳子番号	部位	部位番号	部位名	外観	内面	表面	触	感	備考
外	内	表面	触											
23	頭部	頭	B-8	-	-	頭部	頭部	頭部	10時15分に赤色	10時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
24	頭部	頭	B-10	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
25	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	5時15分に赤色	5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
26	頭部	頭	B-12	-	-	頭部	頭部	頭部	7. 5時15分に赤色	7. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
27	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	7. 5時15分に赤色	7. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
28	頭部	頭	B-8	-	-	頭部	頭部	頭部	7. 5時15分に赤色	7. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
29	頭部	頭	A-7	-	-	頭部	頭部	頭部	5時15分に赤色	5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
30	頭部	頭	B-8	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
31	頭部	頭	B-10	-	-	頭部	頭部	頭部	10時15分に赤色	10時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
32	頭部	頭	B-10	-	-	頭部	頭部	頭部	5時15分に赤色	5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
33	頭部	頭	B-6	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
34	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
35	頭部	頭	C-6	-	-	頭部	頭部	頭部	5時15分に赤色	5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
36	頭部	頭	B-10	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
37	頭部	頭	B-8	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
38	頭部	頭	G-5	-	-	頭部	頭部	頭部	5時15分に赤色	5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
39	頭部	頭	B-10	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
40	頭部	頭	C-6	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
41~26	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
42	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	NS/赤色	NS/赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
43	頭部	頭	B-9	-	-	頭部	頭部	頭部	7. 5時15分に赤色	7. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好
44	頭部	頭	A-10	-	-	頭部	頭部	頭部	2. 5時15分に赤色	2. 5時15分に赤色	頭部赤色	良好	良好	良好

第4表 透物觀察表

標本番号	分類	部	番号	部位	外觀		剖面		備考						
					直徑	高さ	直徑	高さ							
15	頭骨	高合口所	A-7	-	圓錐	1/6	(4.7)	10.5	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	2. 8581灰白色 10X6.6mm	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ		
16	頭骨	高合口所	B-7	-	圓錐	1/8	1.8	6.4	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	2. 8571灰白色 10X6.1mm	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ		
17	頭骨	高合口所	B-11	-	圓錐	1/6	16.7	(4.65)	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	10561灰白色	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ	直角形ノコヘリ形 不完全方錐ナメ		
18	頭骨	頭部	C-10	頭部	A-8	-	圓錐	1/6	(8.45)	-	圓錐ナメ。カヌメ	2. 8516.1黃褐色 10X6.6mm	圓錐ナメ。カヌメ	圓錐ナメ。カヌメ	圓錐ナメ。カヌメ
19	頭骨	頭部	B-9	-	圓錐	-	1.9	縱行	(3.4)	-	圓錐ナメ。不完全方錐形 直角形ノコヘリ形	2. 8542褐銅黃色 10X6.2mm	圓錐ナメ。不完全方錐形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。不完全方錐形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。不完全方錐形 直角形ノコヘリ形
20	頭骨	頭部	A-7	-	圓錐	-	-	圓錐	研片	-	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	2. 8562灰黑色 10X6.1mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形
21	黑色上顎	所	B-7	-	圓錐	1/6	13.7	(4.15)	-	圓錐ナメ。ヘラミガキ	5141灰黑色 10X6.6mm	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ	
22	黑色上顎	所	B-5	-	圓錐	-	-	圓錐	研片	-	圓錐ナメ。ヘラミガキ	2. 8586.6暗紫色 10X6.6mm	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ
23	黑色上顎	所	B-8	-	圓錐	1/6	-	圓錐	研片	-	圓錐ナメ。ヘラミガキ	10587.6黃褐色 10X6.1mm	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ	圓錐ナメ。ヘラミガキ
24	黑色上顎	所	B-9	-	圓錐	1/3	-	圓錐	研片	7.1	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5142黑褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
25	黑色上顎	所	F-5	-	圓錐	1/3	-	圓錐	研片	2.4	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5143黑褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
26	黑色上顎	所	B-9	-	圓錐	1/6	-	圓錐	研片	6.0	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	7. 6508.6暗褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
27	黑色上顎	所	A-10	-	圓錐	1/4	14.2	5.9	6.1	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5144黑褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
28	黑色上顎	所	B-10	-	圓錐	1/3	-	圓錐	研片	(6.5)	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	10584.4に於ける褐色 10X6.1mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
29	黑色上顎	所	B-6	-	圓錐	1/3	13.4	4.6	5.5	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	7. 6507.4に於ける褐色 10X6.1mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
30	黑色上顎	所	B-10	-	圓錐	1/2	11.5	4.75	6.4	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	10581.4に於ける褐色 10X6.1mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
31	黑色上顎	所	C-8	-	圓錐	1/4	-	(2.3)	-	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	2. 8586.6褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
32	黑色上顎	所	E-6	-	圓錐	1/6	-	(6.5)	8.6	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	10582.1黑色 10X6.1mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
33	上顎前	所	B-8	-	圓錐	11.25	4.3	6.6	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	2. 8586.6褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形		
34	上顎前	所	B-10	-	圓錐	1/3	11.8	3.3	7.3	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5106.6褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
35	上顎前	所	A-10	-	圓錐	1/6	-	(2.0)	7.8	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5106.6褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
36	上顎前	所	B-10	-	圓錐	1/5	-	(2.4)	6.7	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	2. 8587.6褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	
37	上顎前	高合口所	B-6	-	圓錐	1/3	-	圓錐	研片	0.75	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	5106.8褐色 10X6.4mm	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形	圓錐ナメ。直角形ノコヘリ形 直角形ノコヘリ形

第5表 過物類解説表

動物学分類名		種別	詳細	アリ	詳細	外観	法医学的 特徴	所存率	検査番号	部位	内面	外面	内面	外面	検査	備考
66	上部鰐	高台骨片	A-9	-	-	■■■	(3.4)	高台骨 6.6	-	■■■	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 4頭・頭部・ 骨部少頭量	良好 内外面に付着り		
69	上部鰐	高台骨片	B-8	-	-	■■■	1.6	-	■■■	5196.8 頭色	5196.8 頭色	良 有頭・1 mm以下	良好 内外面に付着り			
70	上部鰐	頭	B-7	-	-	■■■	1.6	-	■■■	5196.8 頭色	5196.8 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
71	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	1.4	-	■■■	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 白色・赤色・ 黑色・石英少頭	良好 内外面に付着り			
72	上部鰐	頭	B-6	-	-	■■■	1.7	-	■■■	5196.7 頭色	5196.7 頭色	良 石英・全頭多頭	良好 内外面に付着り			
73	上部鰐	頭	B-8	-	-	■■■	1.4	14.2	2.25	7.4	5196.8 頭色	5196.8 頭色	良 石英・頭部少頭量	良好 内外面に付着り		
74	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	1.4	13.8	2.6	8.8	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 石英・全頭多頭	良好 内外面に付着り		
75	上部鰐	頭	A-10	-	-	■■■	1.7	13.8	2.85	8.1	5196.7 頭色	5196.7 頭色	良 石英・頭部少頭量	良好 内外面に付着り		
76	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	1.4	14.2	2.65	7.8	5196.8 頭色	5196.8 頭色	良 白色・頭部少頭量	良好 内外面に付着り		
77	上部鰐	頭	A-7	-	-	■■■	1.6	11.7	2.7	10.2	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	良 金白色・頭部多頭	良好 内外面に付着り (文字)		
78	上部鰐	頭	B-8	-	-	■■■	1.3	-	(1.9)	8.8	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	良 金白色・頭部多頭	良好 内外面に付着り (文字)		
79	上部鰐	頭	B-10	-	-	■■■	1.2	13.3	2.65	8.6	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 金白色・頭部少頭量	良好 内外面に付着り (上)		
80	上部鰐	頭	B-6	-	-	■■■	1.6	-	■■■	5196.7 頭色	5196.7 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
81	上部鰐	頭	B-7	-	-	■■■	1.6	-	■■■	5196.8 頭色	5196.8 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り (上)			
82	上部鰐	頭	C-7	-	-	■■■	1.1	-	■■■	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 有頭・1 mm以下黄色	良好 内外面に付着り			
83	上部鰐	頭	B-10	-	-	■■■	0.5	-	■■■	5196.6 頭色	5196.6 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
84	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	0.9	-	■■■	5196.7 頭色	5196.7 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
85	上部鰐	頭	C-8	-	-	■■■	1.3	15.2	6.6	-	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	5196.4 不定方向ナゲ ヘタリ切り口	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り		
86	上部鰐	小頭骨	B-8	-	-	■■■	1.5	-	(4.15)	-	5196.2 頭色	5196.2 頭色	良 小白色於骨質	良好 内外面に付着り		
87	上部鰐	頭	B-10	-	-	■■■	1.0	-	■■■	5196.7 頭色	5196.7 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
88	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	1.6	-	■■■	5196.1 頭色	5196.1 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り			
89	上部鰐	頭	B-9	-	-	■■■	17.4	(6.8)	-	■■■	5196.1 頭色	5196.1 頭色	良 有頭・頭部少頭量	良好 内外面に付着り		

第6表 遺物観察表

遺物名	標示番号	種別	基準	基準番号	通称名	調査番号	測定番号	測定値	測定範囲	外観	内面	色調	特徴	備考		
										外	内	外	内	外	内	
上部屋内壁	90	土器	甕	C-9	-	-	直筒	破片	17.4 (5.4)	-	ヘタリ後手ナメ	2.5W6.6相色 10W7.4±5.1黄褐色	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	91	土器	甕	C-7	-	-	直筒	破片	17.0 (5.3)	-	ヘタリ後手ナメ	2.5W6.6相色 10W6.4±5.1黄褐色	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	92	土器	甕	C-9	-	-	直筒	破片	14.5	-	日コナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	93	土器	甕	B-10	-	-	直筒	破片	13.5	-	日コナデ	ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	94	土器	甕	B-9	-	-	直筒	破片	23.0 (6.9)	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	95	土器	甕	B-10	-	-	直筒	破片	23.4 (7.0)	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	96	土器	甕	B-8	-	-	直筒	破片	22.8 (6.8)	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	97	土器	甕	B-9	-	-	直筒	破片	26.6 (4.9)	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
上部屋内壁	98	土器	甕	A-9	-	-	直筒	破片	27.2 (6.8)	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	99	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	15.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	100	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	16.2	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	101	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	16.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	102	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	16.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	103	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	16.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
調文上部	104	泥付	甕	Y-4	-	-	直筒	破片	16.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘタケズリ	角石・白褐色	6mm以下断続少 量	良好	
土器	標示番号	種別	基準	基準番号	通称名	調査番号	測定番号	測定値	測定範囲	外観	内面	色調	特徴	備考		
										外	内	外	内	外	内	
99	20	土器	甕	J-5	-	-	直筒	破片	2.8	2.65	直筒ナメ	5W6.6相色	角石・白色	1mm以下 量	良好	
100	30	土器	甕	C-8	-	-	直筒	破片	4.2	2.2	2.26	直筒ナメ	5W6.6相色	角石・白色	1mm以下 量	良好
石器	標示番号	種別	基準	基準番号	通称名	調査番号	測定番号	測定値	測定範囲	外観	内面	色調	特徴	備考		
										外	内	外	内	外	内	
101	30	13	石器	石器	石器	10	-	-	-	直筒	1.1F	5W6.6相色	角石・白色	1mm以下 量	良好	
102	15	8	石器	石器	石器	10	-	-	-	直筒	2.5	1.6	0.25	0.8kg	製作を加工	
103	20	13	石器	石器	石器	10	-	-	-	直筒	2.25	1.85	0.5	1.0kg		

第4章 総括

第1節 遺構の概要

宮園A遺跡第2次調査で検出した遺構は、掘立柱建物4軒（掘立柱建物01～04）、竪穴建物5軒（竪穴建物03～07）、柵列遺構4基（柵列遺構01～04）、道路状遺構1条（道路状遺構01）と用途不明の柱穴、土坑である。今回の調査箇所は土地区画整理事業の道路敷設部分に当たり、幅6～10mと細長い形状であったことから、大部分の遺構は調査区外に展開し、遺構の規模・規格を把握できたのは唯一、掘立柱建物02のみである。ここでは検出された遺構のうち掘立柱建物、竪穴建物について見ていくことにする。

まず掘立柱建物であるが、いずれも建物方向は方位に沿った配置となる。掘立柱建物02は東西1間（2.18～2.40m）×南北2間（3.68～3.98m）の小型の南北棟で、各柱穴は径30～50cmと比較的小さいものであった。このほか、掘立柱建物01は南北3間（5.0m）×東西1間以上（1.92m以上）、掘立柱建物03は南北2間以上（3.24m以上）×東西2間（4.88m）、掘立柱建物04は東西1間以上（2.05m）がそれぞれ確認されている。いずれも調査区外に展開する建物であるが、掘立柱建物01と掘立柱建物03は、南北3間（柱間寸法1.58～1.74m）、東西2間（柱間寸法1.92～2.50m）のほぼ同規模の南北棟と想定され、ある程度の規格性が窺える。

一方、竪穴建物であるが、竪穴建物03、05、06、07はカマド付竪穴建物で、竪穴建物04は防火水槽の関係で、カマドが付くかどうかは判断しない。カマド付竪穴建物のカマドの位置であるが、竪穴建物03・05では西側、竪穴建物06・07で北側に付き、規則性が窺える。また、カマド付近のみの検出となった竪穴建物05のほか、建物の規模として、竪穴建物03で南北幅3.72m×東西幅3.64m、竪穴建物04で南北幅3.6m以上×東西幅4.6m、竪穴建物06で南北幅1.5m以上×東西幅4.34m、竪穴建物07で南北幅0.93m×東西幅3.38mを測る。竪穴建物04→竪穴建物03と先後関係が認められることから、時代を経ると、建物規模がやや小型化することが傾向として窺える。

また掘立柱建物03と竪穴建物06とで、重複関係が認められる。今回の調査で新旧を明らかにできなかつたが、竪穴建物06から掘立柱建物03への変遷を考えるとどめておきたい。

今回の調査では、このほか縄文土器、石器など縄文時代の遺物が出土しているが、縄文時代の遺構は確認されていない。

第2節 遺構の年代

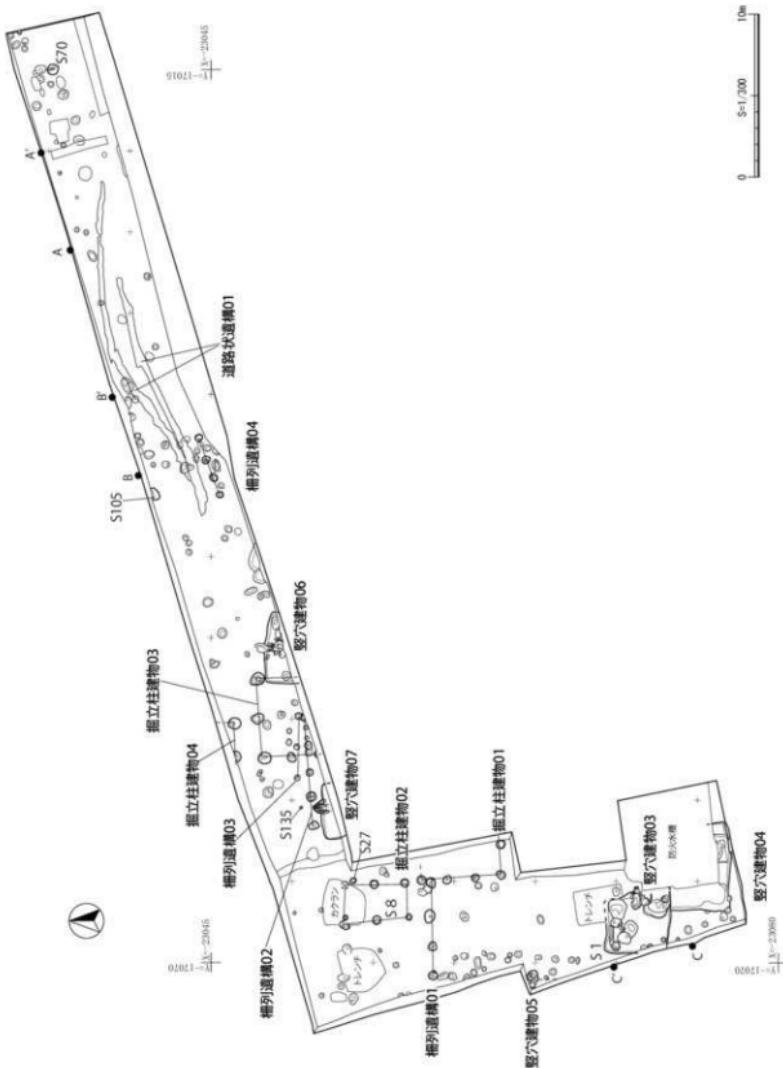
宮園A遺跡第2次調査で出土した遺物の内訳は、古代の土師器が84%、須恵器が11%と全体の95%を占め、続いて縄文土器が4%で、残り1%に弥生土器、陶磁器、鉄製品、土製品、石製品等がある。このうち古代の須恵器、土師器等の分布は調査区の西側、特にB-8・9・10グリッド周辺の遺物包含層（Ⅲ層）から多く出土しており、遺構の分布範囲と一定程度の重なりをみせる。

須恵器、土師器については、环、高台付环、皿などの供膳具や甕などの煮炊具など、一般的な集落の様相を示す遺物が多いなか、円面鏡、転用鏡などの鏡類と「上」等と墨書きされた土器も僅かに認められることから、識字層の存在が浮かび上がる。また供膳具として、内外面に丹塗りが施された土師器が多く、黒色土器A・B類も出土している。須恵器、土師器の供膳具の形態を俯瞰すると、年代的には、8世紀後半～9世紀初頭の土器を主体とし、一部に9世紀中頃～後半まで下る土器（第28図65・73）も僅かに認められる。

一方、黒色土器の年代については、黒色土器A類は8世紀後半～9世紀中葉、黒色土器B類は9世紀中葉～10世紀前半・中葉の範囲に収まるものと考えられる。

こうした供膳具の年代から、集落の造営年代を推測すると、8世紀後半～9世紀初頭を中心として、その後、10世紀中頃まで存続した可能性を指摘できる。今回の調査で、建物の年代を決定するような遺物の出土は竪穴建物05のほかは残念ながら認められていない。竪穴建物05はカマド部分のみの調査であったが、カマド埋土及び周辺から比較的まとまった形で土師器焼片が3個体分出土し、うち1点は完形に近い形での復元が可能であった。こうした出土状況から竪穴建物05の出土遺物は遺構に伴う遺物と判断でき、年代的には8世

第31図 調査区全体図



紀後半～9世紀初頭と考えられる。このことから、堅穴建物05に8世紀後半～9世紀初頭の年代が与えられ、東側に隣接する堅穴建物03も配置状況から同一時期の建物と推定されることから、少なくともこれら2棟は集落の出現期の建物として大過ないものと思われる。

第3節 遺跡の性格

今回の調査区で検出された遺構群は、掘立柱建物、堅穴建物など、集落的景観を想起させるもので、その造営年代として、遺物包含層（Ⅲ層）の出土遺物の年代幅から、先述のとおり8世紀後半～9世紀初頭を中心とし、その後、10世紀中頃まで存続したものと思われる。その集落の範囲は、令和元年度（2019年度）の宮園A遺跡（第1次）発掘調査で実施した西側の調査区において、9～10世紀のカマド付堅穴建物1基のみの確認にとどまっていることから、宮園A遺跡における古代の集落は、今回の調査区周辺及びその東側に広がりをみせることが予想される。

益城台地縁辺部には、古代の集落として、宮園A遺跡のほか、その北西方向に所在する大辻遺跡が知られる。平成22・23年度と平成30年度の2度にわたる発掘調査が実施されており、平成22・23年度の調査では、平安時代の遺構として、掘立柱建物11基、堅穴建物13基（カマド付き5基）が検出され、石帶・転用硯・墨書き土器・瓦・刀子などが出土している。平成30年度の調査でも、掘立柱建物5基（8世紀末～9世紀末頃）、カマド付き堅穴建物24基（8世紀中葉～9世紀初頭）が検出され、墨書き土器や転用硯・刀子などに加え、越州窯系青磁や製塙土器なども出土している。この調査では、出土遺物に官衙的な様相を示すものの、掘立柱建物に規則性がないことから、行政機関に出自する役人の居住集落との見解が示されている。

大坪遺跡から東に1.0km程度離れた位置にある宮園A遺跡においても、今回の調査では、墨書き土器・円面硯・転用硯等の遺物が出土し、官衙的な様相を示すが、掘立柱建物に同一方位を向くという規則性はあるものの、建物配置に規則性がないことから、大辻遺跡と同様の集落と捉えて大過ないものと思われる。また土製の陽物も出土しており、集落内で祭祀行為が行われた可能性を示唆するもので興味深い。

古代律令制下、大坪遺跡、宮園A遺跡が所在する益城台地南縁一帯は、『延喜式』にみる託麻郡津守郷に比定する見解が一般的で、現在のところ場所の特定はできないが、宮園A遺跡から大坪遺跡にかけてのどこかに、郷家のような行政機関が所在した可能性を指摘できよう。

【参考文献】

- 網田龍生 1994 「肥後に於ける回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究X－回転台土師器の諸様相－』 日本中世土器研究会
- 網田龍生 1994 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究－熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集－』 龍田考古学会
- 熊本県教育委員会編 2021 「宮園A遺跡1」 熊本県文化財調査報告第342集
- 熊本市教育委員会編 2009 「戸坂遺跡II－戸坂遺跡第3次調査区発掘調査報告書（都市計画道路新町戸坂線建設にともなう発掘調査報告）－」
- 谷川徹三、川端康成監修 榎崎彰一編 1990 「土師器・須恵器」『日本の陶磁－古代・中世編－』第1巻 中央公論社
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 益城町史編さん委員会編 1990 「益城町史 通史編」 益城町
- 益城町教育委員会編 2013 「大辻遺跡－地域再生道路町道グラムメッセ木山線改良工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査－ 益城町文化財調査報告第22集
- 益城町教育委員会編 2021 「大辻遺跡II－益城町馬水地区災害公営住宅整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告－」 益城町文化財調査報告第25集

写真図版

図版 1



1. 宮園A遺跡第2次調査区より船野山、飯田山を望む（北から）



2. 宮園A遺跡第2次調査区より阿蘇南外輪山を望む（西から）



1. 調査区西側完掘状況



2. 調査区中央～東側完掘状況

図版 3



1. 掘立柱建物 01 検出状況（南西から）



2. 掘立柱建物 01 完掘状況（南西から）



3. 掘立柱建物 02 検出状況（北から）



4. 掘立柱建物 02 完掘状況（北から）



5. 掘立柱建物 03 検出状況（北から）



6. 掘立柱建物 03 完掘状況（北から）



7. 掘立柱建物 04 検出状況（南から）



8. 掘立柱建物 04 完掘状況（南から）



1. 竪穴建物 03 検出状況（南から）



2. 竪穴建物 03 土層断面（南から）



3. 竪穴建物 03 硬化面検出状況（南から）



4. 竪穴建物 03 カマド土層断面（西から）



5. 竪穴建物 03 カマド東西断面（南西から）



6. 竪穴建物 03 カマド完掘状況（西から）



7. 竪穴建物 03 カマド完掘状況（西から）



8. 竪穴建物 03 完掘状況（西から）

図版 5



1. 竪穴建物 04 検出状況（西から）



2. 竪穴建物 04 南北土層断面（西から）



3. 竪穴建物 04 東西土層断面（南から）



4. 竪穴建物 04 硬化面検出状況（西から）



5. 竪穴建物 04 完掘状況（西から）



6. 竪穴建物 05 検出状況（南から）



7. 竪穴建物 05 土層断面（南から）



8. 竪穴建物 05 遺物出土状況（南から）



1. 竪穴建物 05 完掘状況（南から）



2. 竪穴建物 06 検出状況（西から）



3. 竪穴建物 06 土層断面（西から）



4. 竪穴建物 06 カマド及び遺物出土状況（西から）



5. 竪穴建物 06 完掘状況（西から）



6. 竪穴建物 07 検出状況（北西から）



7. 竪穴建物 07 土層断面（西から）

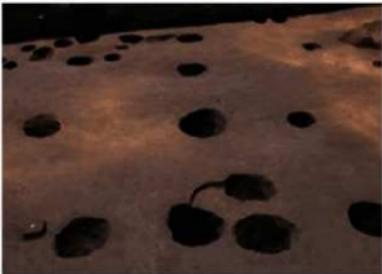


8. 竪穴建物 07 カマド完掘状況（南から）

図版 7



1. 竪穴建物 07 完掘状況（西から）



2. 構造 01 完掘状況（東から）



3. 構造 02 検出状況（西から）



4. 構造 02 完掘状況（西から）



5. 構造 03 検出状況（西から）



6. 構造 03 完掘状況（西から）



7. 構造 04 完掘状況（東から）



8. 道路状構造 01 完掘状況（西から）

图版 8



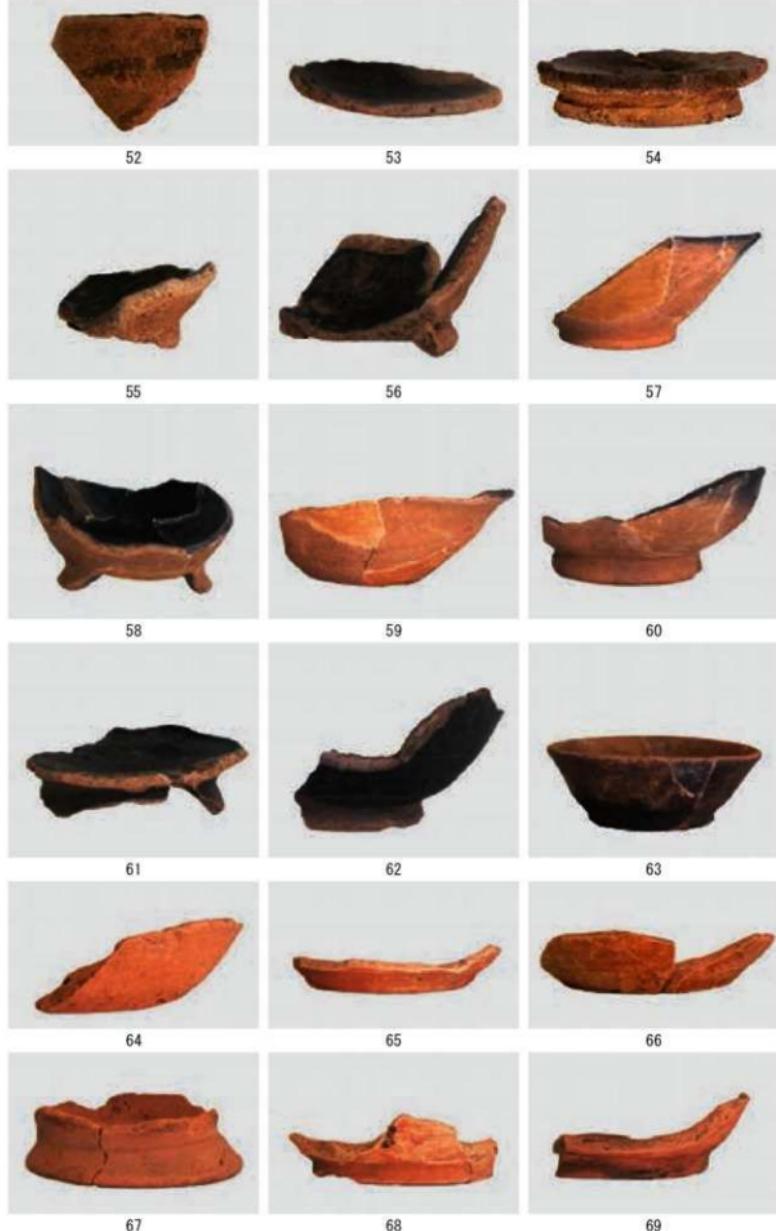
圖版 9



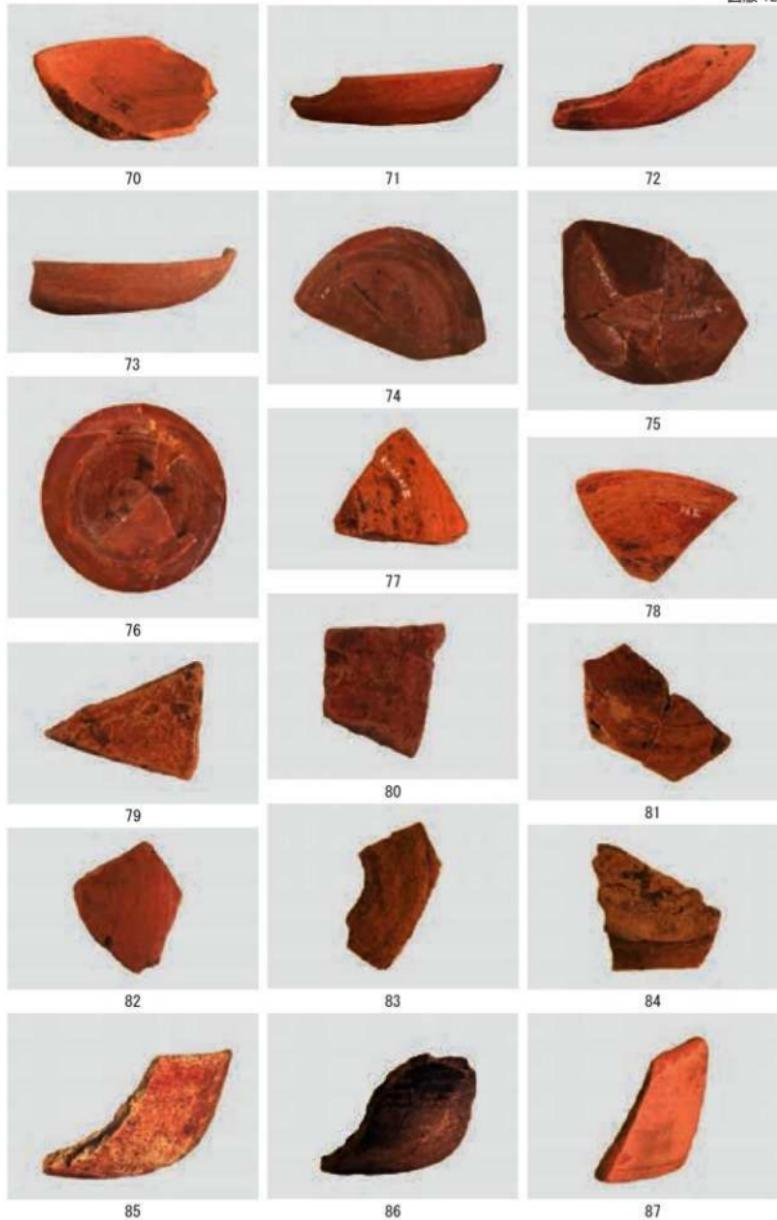
図版 10



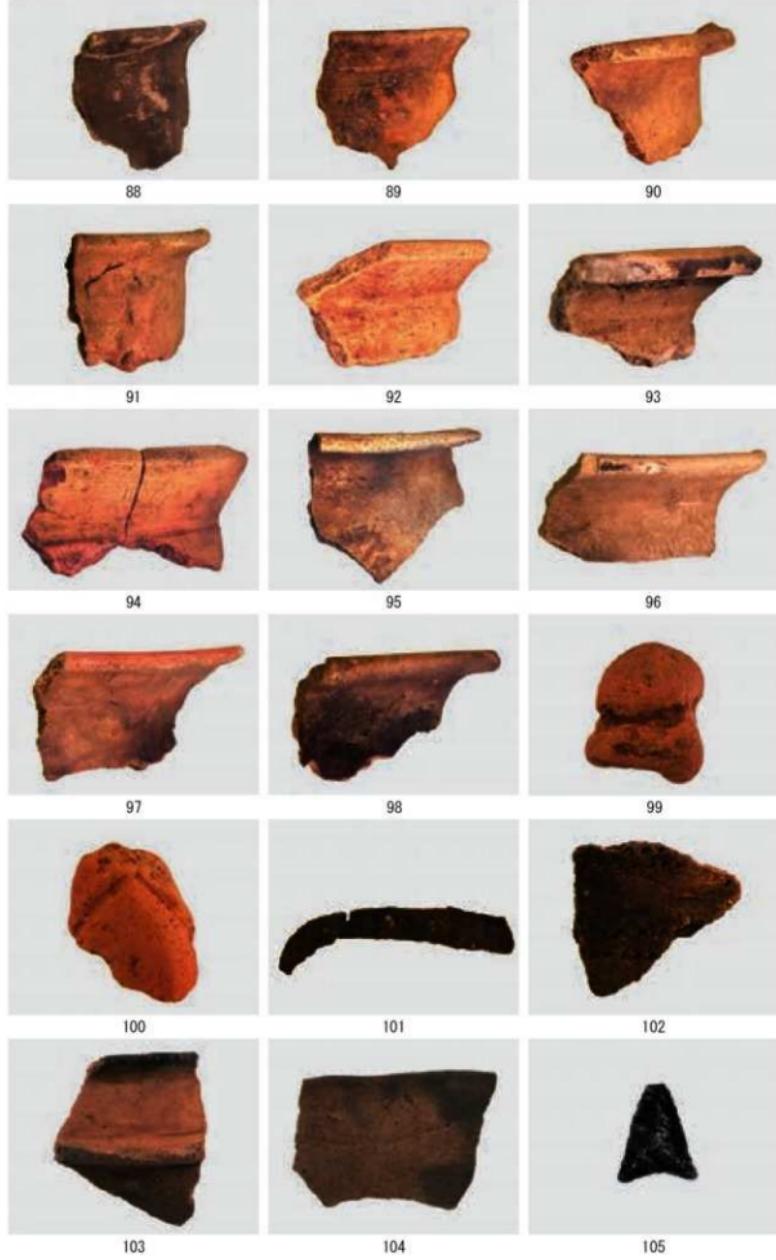
圖版 11



図版 12



图版 13



報告書抄録

ふりがな	みやぞのAいせき 2
書名	宮園A遺跡 2
副書名	益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第343集
編著者名	矢野 哲介
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 Tel.096-383-1111
発行年月日	令和4年(2022年)3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやぞのAいせき 宮園A遺跡 2	くまもとけんいなみ市ひたちじんぐつ 熊本県上益城郡 益城町大字宮園	43 443	020 31.06145°	32° 47' 31.06145°	130° 49' 03.90046°	2020.04.21 2020.08.21	635	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮園A遺跡	集落	縄文時代 古代	掘立柱建物 竪穴建物 柵列遺構 道路状遺構	縄文土器 須恵器 黒色土器 土師器	古代の掘立柱建物4軒、竪穴建物5軒、柵列遺構4基、道路状遺構1条を検出。

要約	熊本県上益城郡益城町宮園・木山に所在する宮園A遺跡は、縄文～中世の複合遺跡である。台地の南縁辺部に所在し、南には熊本平野の東端にあたる平野が広がり、条里跡が推定されている。平成28年熊本地震からの復旧・復興を目的とする益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴い、令和元年度(2019年度)から発掘調査が実施され、今回の調査で2次を数える。第1次調査では甕棺墓13基が確認され、弥生時代中期中葉から後葉にかけての墓域の広がりが判明する一方、今回の第2次調査では、新たに掘立柱建物4軒、竪穴建物5軒と8世紀後半から10世紀中頃にかけての古代集落の一端が明らかとなった。これは、同じく古代の建物遺構が発見された大辻遺跡と併せて、台地縁辺部の古代集落の展開を考えるうえで重要な成果と言える。
----	--

本書の仕様

- 版型 A4判
- 刷版 13級 M.S明朝
Adobe InDesignCS5.1 (forWindows)
- 印刷 オフセット
- 製版 本誌のモノクロ及びカラー印刷
写真是全てスクリーン露数220露で製版
- 用紙 表紙: アーチボスト紙 220 g
見返し: 上質紙110 kg
片文・目次等・本文・抄録・奥付: 上質紙110kg
大図・書簡カバー・写真図版: 特アートSA金箔 135kg
- 製本 手綴継じ
- 本誌加工 IP(ポリプロピレン)貼り

熊本県文化財調査報告 第343集

宮園A遺跡2

—益城中央被災市街地復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

発行年月日 令和4年(2022年)3月15日刊行

発 行 熊本県教育委員会

熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印 刷 シモダ印刷株式会社

熊本県熊本市中央区上水前寺2丁目16番16号

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育総務局文化課
発行年度：令和3年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第343集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：宮園 A 遺跡 2

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2023年3月1日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>